

版 權 免 許

志賀雷山譯

人 身 生 理 解 音

明治十年
五月刊行

集英堂藏板

東亞圖書集成

明治十年圖書局發行

宙古今上自人類下至禽獸蟲魚苟具性命
 者孰不知愛身而惜生焉然至於其所以可愛
 且惜則漠然矣禽獸蟲魚置不論也以人而不
 講究其理可乎世執刀圭之人講之者或有之
 然概泥於舊套局於死法其說荒唐難解生理
 解剖之事夢想所不知醫家且然況世人乎及
 歐洲之學傳我東方名士碩學不乏其人而世
 人猶且漠然可勝慨歎耶夫人受命於天自稱
 萬物之靈上者說經濟下者各從事於其業而

八重

序

集卷之三

不知其何以視聽思慮、何以呼吸言語、何以起臥飲食疾病夭札、疾病之事一委之於醫家、如始不關自家者、嗟乎、此豈醫家所獨闕乎哉、今日文化大開、海內郡邑無不有學、而吾椽木師範、醫教科置入身生理、可謂得其要、而未得好書、頃者同僚志賀氏、新譯英人戎遜氏所著、題曰生理解剖學、繙而讀之、人身氣血之運行、神經之妙機、消化之靈能、分泌之統派、外之四肢五官之活潑、內之五臟六腑之精巧、與夫骨骼、肌肉之裝成、皮髮爪牙之作用、莫不悉辨其因、

除舊而舉新、撮要而略贅、學徒由是而有得、則始不背於萬物之靈、而攝生之道亦思過半矣、宋儒云、人亦一個小天地、西哲云、精神本做於天而造、二語果可信也、則將推而悟造化之機、不特止於知身之可愛、生之可惜也、乃憇惠付諸剞劂氏、

明治九年十二月

廣田恒子道氏撰

人身解剖学
第一卷
序説

人身理解剖卷之上

志賀雷山譯

第一篇

序説

解剖学ハ最モ廣汎ニノ宇宙間有ル所ノ諸活体
ノ形状及造構ヲ知ル是ナリ
生理学ハ活体ニ因リテ成ル所ノ官能ト体ヲ裝
成スル所ノ諸機關ニ因リテ出ル所ノ官能トヲ
知ル是ナリ
今解剖及生理ノ學ニ於テ當ニ先ツ辨識スベキ

人身理解剖学
第一卷
序説

所ノ最要ノ者ヲ學ル丁左ノ如シ

人身ヲ分チテ三部トス曰ク頭頸曰ク身曰ク四肢

波○頭ハ体ノ頂上ニ在リテ腦ヲ保チ感覺ノ機

関ヲ藏メ顔面ヲ具フ而ノ顔面ハ口鼻ノ二孔ヲ

存ノ身部ニ通ス○頸ハ頭ヲノ身ニ附着セシム

ルノ部ナリ其圍ハ小ニノ稍長ク其中食管ト氣

管トヲ通ス○身ヲ分チテ二部トナス曰ク胸曰

ク腹胸ハ血液循環及呼吸ノ機關ナル心肺二臟

ヲ藏メ腹ハ胸ノ下ニ在リテ飲食消化ノ機關ナ

ル胃肝及ヒ他ノ諸器ヲ藏ム○四肢ハ身ニ附屬

スルノ肢ニノ上下合ノ四ツ其上ニ在ルノ二ツヲ臂

若ハ上肢ト言ヒ下ニ在ルノ二ツヲ脚若クハ下肢

ト言フ

体ノ外面ハ全ク皮膚ヲ以テ之ヲ包羅シ皮膚ハ

銳敏ノ感覺ヲ以テ全体ヲ擁衛ス其下ニ脂肪ノ

層アリ人々厚薄同シカラス肥瘦各異リ此兩層

ヲ以テ筋骨及他ノ諸器ヲ被覆ス骨ハ以テ全軀

ヲ支柱シ筋ハ以テ運動ノ機關ヲ致シ血管ハ以

テ榮養液ヲ運ヒ神經ハ以テ感覺ヲ司リ運動ヲ

督シ頭胸腹ノ三腔ハ圍壁アリ以テ諸器ヲ容受

人身生理學

卷之上

身生理學

人身体ノ造構

人身体中ニ生成スル所ノ者即身体ヲ装成スル
 所ノ造構先ツ之ヲ大別メ二種ト為ス曰ク凝体
 曰ク流体○流体ハ總テ体中ニ在リテ部位ヲ占
 スルノ最モ大ナルモノニシテ其量亦多キ者ハ
 血是ナリ血ノ脉管ヲ穿流スルヤ其装置繁ニメ
 運行ハ順序アリ以テ全軀ニ普達ス血ハ身体諸
 部ヲ通流スルノ間ニ種々ノ液ヲ生ス此ヲ分泌
 ト曰フ此液動物体中ノ經濟ニ在リテ須臾モ無

カル可ラザル緊要ノ者トス其最モ顯著ナル者
 ハ膽液ゲル脾液ヒ精液セイ及ヒ津唾ナリ○凝体ハ疎密硬
 軟各齊シカラス種類モ亦多シ○齒ト骨トハ堅
 密強固ニメ其組織象牙ニ類似ス○軟骨ハ軟柔
 ニメ弾力アルノ質ヲ具ヘ筋ハ軟弱又一層ヲ加
 ハヘ神經ト髓ニ至リテハ逾軟柔ニメ指頭ヲ以
 テ容易ニ之ヲ頽落セシムヘシ○蓋シ諸部ノ質
 ハ啻ニ其疎密ヲ異ニスルノミナラス而メ其色
 彩亦各別ナリ○齒ハ白クメ光澤アリ骨ハ白色
 ニメ微黄ヲ帶ヒ筋ハ深紅ヨリ黧赤ニ至ル是ヲ

各色ノ度ト爲ス蓋シ此色ノ殊異ナルハ未タ必
 シモ全ク然ルニアラス唯其組織中保ツ所ノ血
 量ニ因ルノミ
 諸組織ノ實質中ニ在リテ各相類似スル所ノ素
 質アリ而メ又此素質ヲ保ツノ小体アリ其數多
 メ且ツ繁シ之ヲ細胞ト名ク其形極メテ微細ニ
 メ精好ノ顯微鏡ヲ用ヰルニ非ルヨリハ得テ之
 ヲ覽ル可ラス其状ハ依稀トシ水泡ノ如ク各一
 種ノ性ヲ保ツ此細胞各分界スル所ノ壁ヲ存メ
 壁間ハ總テ液ヲ以テ之ニ填テ而メ其組織ト細

胞トノ異ナルニ隨ヒテ其液質モ亦著シク殊ナ
 ルモノナリ但シ各處ノ細胞ハ壁間ニ存スル所
 ノ液ト共ニ必ス每個小ニメ硬固ナル仁ヲ保ツ
 是同一一般ナリ然メ此仁細胞毎ニ存スルノミナ
 ラス諸組織ノ中ニモ亦獨リ仁ノミ裸體散在ス
 ルヲ觀ル
 細胞ノ形状一ナラス圖中ニ之ヲ擧ク宜ク參考
 スヘシ

- 第二十九圖、、、血球
- 第二十八圖、、、種毛表皮ノ細胞

第四十二圖、胃ノ細胞

第四十五圖、肝ノ細胞

第四十八圖、神經ノ細胞

蓋シ諸組織ノ發育スルヤ恐クハ皆此細胞ノ堆積ヨリメ其始メヲ資ルナラン然レ此者漸ク長成スルニ隨ヒ組織本然ノ蜂巢質ナル者變遷メ細胞漸ク消亡シ以テ他ノ形質ヲ取ルナリ此等ノ變化ハ嘗テ健全ノ組織官能モ令ハ衰弱ヲ致ス者ニ於テ特ニ之ヲ目撃スル所ナリ但シ運管銳敏ナル腺ノ如キハ細胞殊ニ多シ

多少纖維質ヲ保ツ所ノ組織ハ其全質悉ク細胞ヲ以テ之ヲ充實ス就中其最多キ者ハ

第八圖、鞅帶ト名ク即其一ナリ之ヲ纖維組織

第二十七圖、動脈ノ黃纖維即チ彈力纖維ニ

メ一種別様ノ形狀ヲ呈ス

第十九圖、筋纖維

第四十八圖、神經纖維

例ナリ

鞅帶、動脈、筋、神經等各纖維ヲ有ツトイヘレ其造

構ハ又自ラ別アリ蓋シ此纖維ノ性タル猶細胞
 ノ殊異ナルト同一般ニシテ各部純一ノ者ニ非
 ス恐クハ細胞及其仁ノ長短齊シカラザルニ隨
 ヒテ各其性ヲ異ニスル者ナランカ
 身体諸部膜アリ共ニ擴張スルノ性ヲ具フ就中
 粘膜^{ネマ} 沕^{ウキ}乙膜^イハ其最要ナル者トナスナリ○粘膜
 ハ口ヲ外表ニ開ク所ノ空^{クウ}穴^{ケツ}中ニ在リテ其裡面
 ヲ綴^ズ蔽^フスル者ナリ一目ノ以テ見ルヘキ者ハ口
 鼻ノ孔^{アナ}内ヲ綴^ズルノ膜是ナリ甲ハ氣管ヨリ肺中
 ニ展布シ乙ハ胃管ヨリ胃ニ下リ單ヒテ全腸ヲ

經テ肛ニ達ス其面不斷澱然トク少量ノ液ヲ分
 泌ス其質粘滑ニシテ滋和ナリ之ヲ粘液ト曰フ此膜
 蔽フ所ノ内面ハ必ス道路アリテ物之ヲ過リ個
 ノ器ヨリ那^カノ器ニ至リ又那^カノ器ヨリ他ノ器ニ
 進ム例之空氣ハ氣管ヲ經テ肺ニ至リ飲食ハ胃
 管ヲ過キテ胃腸ニ進ムノ類是ナリ此膜面ヲ潤
 澤スルノ液ハ飲食物ノ通行ニ方リテ膜質ノ傷
 害ヲ防護シ又能ク堅硬ノ品ヲ轉過シ易カラ
 シム
 沕乙膜ハ粘膜ノ如ク器面ヲ遮蔽スル者ニ非ス

入生理學

卷之十一

六

集英堂藏版

其質密ニシテ其裡ハ空隙ヲ為ス此膜ハ大ナル腔内ニ在テ其中ニ諸器ヲ包藏ス此故ニ沕乙膜ハ諸器ノ位置官能ノ為メニ運動セザル可カラサルノ處ニ於テ存在シ其質固ニ滑澤ニシテ其面ハ少量ノ液ヲ含ミ而シテ之ヲ滋潤シ以テ其運動ヲノ易カラシム沕乙膜ノ中ニ就テ最モ至要ナル者ハ胸膜。心囊。及ヒ肺膜是ナリ胸膜ハ以テ肺ヲ覆ヒ心囊ハ以テ心臟ヲ包ミ腹膜ハ以テ胃腸及ヒ其他ノ諸器ヲ包容ス○又沕乙膜ニ類似スルノ膜アリ之ヲ滑液膜ト名ク此膜關節ニ在リテ

骨端ヲ圍包シ居恒粘滑ノ液ヲ分泌シテ兩骨相接スルノ面ヲ潤澤ニシ以テ其運動ヲ滑利ナラシム

ム 人身体ノ舍密

人身体自然舍密ノ化合ハ諸部ノ色澤。織成及自餘理學的ノ性質其所見ヲ異ニスルニ隨ヒテ亦自ラ差異アリ然レ更ニ舍密實驗ニ因リテ之ヲ檢點スレハ身体一般許多ノ元素ヲ發明ス
舍密家天然ノ物体ニ就テ檢出スル所ノ元素頗ル多シ而シテ獨リ動物体ノ形成ニ於テノミ須要ナル

元素ハ鮮少ナリト為ス就中其最モ貴重ナル者
ハ酸水窒炭ノ四素ナリ蓋シ此四元素ハ動物界
中ニ亘リテ之ヲ存セサル者ナシ是ヲ以テ之ヲ
動物ノ元素ト曰フ故ニ稱ノ動物界ト呼フ片ハ
則其物必ス此化合物ヲ存ス總テ機活アルノ者
ハ上ハ人類ヨリ下ハ昆虫ニ至ルマテ皆然リ洎
餘ノ元素ハ動物体ノ造構ニ於テ部位ヲ劃リテ
顯著ノ量ヲ存ス其最要ナル者ハ所謂非鑛屬元
素ノ中ニ在リテハ硫黃。磷。矽。略。味。啞。味。ナリ鑛屬元素ノ
中ニ在リテハ加榴母。曹叟母。加爾丘母。麻屈。涅。叟

母及ヒ鐵ナリ

元素ノ比例ハ各異ナリ二元素或ハ其他幾種ノ
元素配合ノ以テ形質ヲ裝成ス此者動物組織ノ
中ニ在リテ其量居多ナルノ故ヲ以テ之ヲ動物
体ノ近成分ト名ク○近成分ヲ區別ノ二類トナ
ス一ハ窒素ヲ以テ貴重ノ素ト為ス者一ハ窒素
ヲ含有セサル者是ナリ
含窒近成分中纖維質。蛋白質。乾酪質。膠質及ヒ軟
骨膠質ヲ以テ貴重ノ者ト為ス此物窒素ニ副ヒ
テ炭素。酸素。水素ヲ有シ其量顯著ナリ而シテ硫黃

ト燐トノ少量ヲ含ム○纖維質ハ血ト筋ノ兩體ニ於テ存シ蛋白質ハ特ニ血及筋ノ中ニ含有スルノミナラス諸動物液中ニ在リテ至重ノ成分ヲ爲ス乾酪質ハ乳連中其量最モ多ク血中ニ在リテモ亦其少量ヲ檢出ス膠質ハ骨質中ニ在リテ顯著ノ比例ヲ存シ軟軟ナル組織中ニ於テモ亦之アルヲ見ル纖維質中殊ニ然リ軟骨膠質ハ軟骨至要ノ成分ヲ爲ス無窒近成分中脂肪質ヲ以テ其最モ著シキ者トナス是即体中ノ脂肪ヲ製造スル者ニシテ種類

鮮レトセス其最切要ナル者ハ含密家ノ所謂ステアリン・マーガリン及ヒ油質ヨリ成ル此三ニ脂肪中ニ在リテステアリンハ脂肪中ノ硬質ヲナシマーガリンハ其眞珠狀質ヲナス者ナリ硬脂肪ハ硬脂肪ハ腰部及腎臓中殊ニ多シ其量ヲ含即チステアリンノ堆積ヨリ成リ油質脂肪ハ油ヨリ成ルナリ○諸種ノ脂肪質ハ亞爾加里性ノ物ト共ニ融和スレハ則抱合シテ石鹼トナルノ性ヲ具フ然氏別ニ一種ノ成分アリテ石鹼ヲ爲サス所謂コレステアリン是ナリ此物ハ膽液及腦髓ノ中ニ在リテ檢出ス

ヘキ者ナリ

蓋シ硫黄ト燐ハ動物組織ノ造構ニ於テ切要ノ
 元素ト爲ス此物上文舉クル所ノ會室近成分中
 ニ混在シ硫黄ハ又髮爪及ヒ表皮ノ中ニ在リ而
 ノ其少量他ノ組織ノ中ニ散在ス○燐ハ神經組
 織ノ中ニ於テ顯著ノ量ヲ檢出ス腦髓中ニ在リ
 テハ殊ニ然リ燐酸ノ如キハ酸素ト化合シテ以
 テ動物纖維ヲ爲ス所ノ諸組織中殆ト之レ有ラ
 サル無シ此酸血中ニ在リテハ曹達ト化合シ筋
 中ニ在リテハ剉篤亞斯ト化合シ骨及齒ノ中ニ

入リテハ石灰及麻^マ屈^ク涅^ネ失^シ亞^アト化合ス○咯^カ味^ミ嗽^ソモ
 亦諸組織中ニ於テ至重ノ量ヲ有ツ蓋シ此者ノ
 化合性ヲ存スルヤ他物ト相和スル^カ咯^カ味^ミ爾^ニ化
 曹^{コウ}叟^{ソウ}母^モノ即尋常ニ於ケルカ如シ故ニ鐵性ノ曹叟
 母ト爲リテ体中一般ニ之ヲ存ス恐ラクハ人身
 中ノ織成總テ多少此複合ノ比例ヲ存セサル者
 ナカラシ此鹽此ノ如ク全体ニ須^ス要^{ヨウ}ナルノ故ヲ
 以テ日常ノ飲食ニ鹽氣ヲ嗜好^クシ若シ登日此鹽
 ニ^ニ缺^{ケツ}乏^{ハツ}スレハ則^{スレバ}渴^{カク}望^{ボウ}甚^シキニ至ルノ理^ニ以^テテ^テ會^カ得^{バツ}
 ス可^シレ○鐵モ亦廣大全組織ノ中ニ在リテ其少量

ヲ有ツト雖凡其最大真座イロコロハ即チ血ナリ蓋シ血
 球ハ鐵ヲ以テ須要ノ者ト爲シテ鐵ハ其著大ナ
 ル成分ヲ爲スヲ以テナリ
 上文既ニ説了スル所ノ許多ノ元素ノ外猶僅ニ
 他物アリ以テ微々全軀ノ中ニ配達ペリトウダス然凡其用
 甚タ切要ナラスシテ肉眼及ヒ他ノ檢査ケンサ法ノ得
 テ之ヲ觀ル可カラサル者ナリ是亦動物組織ノ
 中ニ化合ス若シ其各自微妙ノ成分ヲ看破ミソクセシ
 ト欲セハ尚精密ナル舍容力ノ助ヲ待タザル可
 カラサルナリ

官能通論

凡テ組織ニ因テ成ル所ノ官能ハ之ヲ分チテニ
 大類ト爲ス曰ク植物体生活ノ官能曰ク動物体
 生活ノ官能是トリ有機体イキテウキモノノ官能ハ動植ニ物ニ
 論ハク所謂生活機イキタハタラキナル神秘ノ生理ヲ存スルニ
 因リテ成ルノ故ヲ以テ總テ之ヲ有機生活官能
 ト名ツク蓋シ此官能ノ有機生活界中ニ在ルヤ常
 ニ必ス同量平均ツリヤヲ得ル者ニ非ス專ラ生命保續イキノキ
 ノ爲メニ其功績ヲ逞ツヨクシクスル力故ニ其榮養物イソナヒノモノ
 素即食物ノ吸收ヲ外ニ求メ以テ全軀ヲ補充シ

且生育シ且保護シ諸ノ織成ヲシテ悉ク皆其化
 物トナラシメ而シ又^キ嘔^キ吐^キト分泌トノ官能ニ頼
 リテ其質ヲ^キ清^キ掃ス

動物生活ノ官能ハ特ニ動物体ニ於テノ之ヲ
 見ルヘシ其用殊ニ神経系統ノ力並ニ諸部ノ^サ知

覺及ヒ活動機關ノ力ニ因リテ發顯ス○動物体

固有ノ^{イキテハタラカク}活力中其最モ貴ブ可キ者ハ^サ知覺是ナリ

是ニ由リテ動物体ノ造構外ヨリ此ニ^サ致スノ感

動ヲ觸知シ或ハ内ヨリ造構上ニ發スルノ變化

ヲ了解ス此レハ是造構善ク感覺ノ性ヲ保チテ

此理會ニ適應スル所以ナリ○知覺ニ次キテ貴

フ可キ者ハ^{コノ}隨意ノ運動是ナリ是ニ由リテ動物

ハ其身体ヲ舉ケ意ニ隨ヒテ其位置ヲ變シ^{コノ}個部

ヨリ^{コノ}那部ニ轉移ス○人ニ在リテハ則生活ノ官

能自餘ノ動物ニ卓越シテ其感覺超絶シ其所^{コノ}為

モ亦端正ナリ是即神経系ノ營作精神才能ト一

致シテ大ニ發育ヲ得ル所以ナリ

消化機論

齒牙ノ食物ヲ咀嚼スルハ即^{コノ}消化ノ初期ニシテ

其碎細スル者ハ^{コノ}唾腺ヨリ分泌スル所ノ^{コノ}津唾ト

口中ノ粘膜ヨリ分泌スル所ノ粘液トニ由テ能ク混和軟爛ス此津唾ナル者ハ飲食ヲ消化スルノ液ニシテ食物ヲ喫セサルノ間ハ酸性トナリ喫食ノ時ハ亞爾加里性トナルモノナリ粘液此津唾ニ合スレハ消化ノ力益加ハリテ澱粉及ヒ蔗糖ヲ蒲桃糖ニ變質ス試ミニ澱粉ヲ嘗^{コナレ}レハ其津唾ト和スルニ從ヒテ漸ク甘味ヲ生スルモノハ他ナシ是其蒲桃糖ニ變化シタルノ確徵ナリ

○總テ津唾ト和シテ軟爛シタル食物ハ咽頭及食管ヲ經テ胃ニ下リ其裡膜ヲ刺衝スレハ其膜

此刺戟ニ感シテ所謂蠕動機ナル蟲様ノ運動ヲ起シ胃ノ下口モ自ラ閉チ胃液モ之カ為ニ湧出シテ食物ハ蠕動機ノ為ニ能ク胃液ト混和シ粥汁ノ形トナル而メ消化宜キヲ得レハ胃腑漸ク食物ノ刺戟ニ慣レテ其蠕動ヲ止メ胃ノ下口モ亦從ヒテ緩開シテ之ヲ腸ニ輸ル而メ腸ハ胃ノ輸ル所ノ飲食ヲ受ケ又其刺戟ニ因リテ亦蠕動ヲ起シ膽脾ニ液之カ為ニ送シテ其機能ニ因リ食物ト混和シテ之ヲ消化ス

總テ諸液ノ食物ヲ消化スルヤ各自ラ多少ノ差

異アリ故ニ胃液ハ酸性ノモノニシテ消化ノ能
 津唾ト殊異シ津唾ニ消化スルモノハ胃液ニ消
 化セス又胃液ノ能ク消化スルモノハ津唾之ヲ
 消化セス而シテ津唾ニ消化セサル食物ハ胃ニ下
 リテ後胃液之ヲ消化シ又津唾ニテ變質スルモ
 其消化ノ全キヲ得サルモノハ腸ニ下リテ後膽
 二液(即亞爾加里性ノ液)之ヲ消化シ但シ其腸ニ
 前胃中ニ在リテモ亦其食物ト共ニニ胆汁及ヒ
 胆汁ニ液ノ作用ヲ受クルモ未タ消化ノ十全ナ
 ラサルモノハ小腸ノ下際ニ到リ亞爾加里性ノ

腸液ニ因リテ全ク消化ス又胃液ノ消化作用ヲ
 受クルモ變質全カラサルモノハ小腸上際ノ酸
 性液ニ遇ヒテ盡ク消化スルモノナリ
 膽腴ニ液ハ本質亞爾加里性ニシテ飲食スル所
 ノ水性ノ物ト油性ノ物トヲ能ク混合消化シテ
 油乳質ト稱スル石鹼様ノ液ト爲シ以テ吸収管
ノ聚採ニ供ス世人皆能ク水ト油トヲ取り一器
ノ中ニ之ヲ投入スルモ水ハ水ヲ引キ油ハ油ヲ
 引キテ各相離レテ相和セサルヲ知ル然レモ若
 シ之ニ加フルニ亞爾加里性ノ物ヲ以テスレハ

忽チ和合シテ一種ノ液ト爲ル石鹼ヲ製造スル
 ノ法之ニ異ナルナシ此ニ液ハ實ニ消化ノ作用
 ニ至要ノモノナリ○借飲食ノ物以上謂フ所ノ
 諸作用ヲ受ケ小腸ニ至リテ終ニ糜爛醱熟シテ
 其状恰モ乳汁ノ如シ而ノ其滋養分ハ吸收管之
 ヲ取リテ身体ノ營養ニ供シ淋管ノ論下ニ其
 詳ナリ参考セヨ
 糞粕ハ諸廢物ト共ニ大腸ニ下リ尿トナリテ肛門
 ヲヨリ排泄ス總テ飲食ノ消化ハ齒牙ノ作用ヲ除
 クノ他皆機械的ニ係ラスシテ化機_{モイミノウヘ}的ニ因ルモ
 ノト知ルヘシ

第二篇

骸骨

体質ヲ形成スルニ其適當ノ衛護ヲ得諸部モ亦
 其位置ヲ保チ各自ノ官能ヲシテ十全ナラシメ
 ンカ爲ニ堅實ナル楨幹ヲ以テ之ヲ支柱スルハ
 至要ノ器械ナリ此楨幹ヲ名ケテ骨ト曰フ是即
 確乎タル堅硬物ニシテ其内部ニ存在シ以テ支
 柱ヲ体軀ニ賦與ス此骨生活体中ノ所在ト一般
 位置ヲ亂サス互ニ相聯接スル者之ヲ指テ骸骨

即骨格ト曰フナリ

第一圖 掲ク 卷末ニハ大人骸骨ノ前面ナリ

骨ハ自然ノ形勢ニ因リテ曰ク頭及頸曰ク身曰

ク四肢ナル三部ヲ以テ區別ス可キハ 一目瞭然

ナラン ○骨ノ名ヲ命スル其義一ニ非ス甲ハ其

形状ノ相似テ同列ヲ爲スヲ以テ之ヲ 類聚シテ

總名ヲ命ス例之脊柱ヲ 層累スルノ骨總テ之ヲ

名ケテ脊推即脊骨ト曰フカ如シ但シ其麗鮮ナカ

ラサルノ故ヲ以テ別ニ各節ノ名ヲ設ケ以テ之

ヲ區別ス乙ハ其名ヲ生体中ニ在ル所ノ部位ニ

取リテ名ヲ命ス即前頭骨腿骨等是ナリ丙ハ測

量家ノ風ニ 恠ヒ或ハ形容某物ニ類似スルニ取

リテ之ニ名ヲ命ス即チ立方狀骨 鐘狀骨 舟狀骨

是ナリ蓋シ此名稱ノ解剖家ニ傳ハル所 以ハ 邈

乎トシテ既ニ數百年前ノ著述者ニ出テ或ハ某

骨某物ニ後レテ檢出シ之ニ命スルニ類似ノ名

ヲ以テスト雖モ然レ其來舊クシテ古ニ 湖リテ

回想スルニ足ル

上文既ニ説了スル所ノ部位ニ隨ヒテ之ヲ區分

シ先ツ骨名ヲ揭示スルト左ノ如シ

○頭及ヒ顔ノ骨

- 1 前額ノ骨、前頭骨(フロントアルボーン)
- 2 頭側ノ骨、顛頂骨(パライエタルボーン)
- 3 頭ノ後部ノ骨、後頭骨(オクシピタルボーン)
- 4 顛顛ノ骨、顛顛骨(テポールボーン)
- 5 楔狀ノ骨、胡蝶骨(スノイド)
- 6 鼻ノ骨、鼻骨(チーゼルボーン)
- 7 淚管通スル所ノ骨、淚骨(ラクリマルボーン)
- 8 頰ノ骨、銜骨(マラーレル)
- 9 錐狀ノ骨、錐骨(ヴァーメル)

10 上顎ノ骨、上顎骨(シユピタルマクシラ)

11 下顎ノ骨、下顎骨(インフェリヤルマクシラ)

上件記載スルノ外猶他骨アリ亦頭及ヒ顔ノ骨ニ属ス○滿面孔アリ其狀篩眼ノ如キ者此ヲ篩骨ト曰フ此骨他骨ニ圍擁セラレ本圖中之ヲ見ルヲ得ス但其一部眼窠ノ内壁ニ在リテ現ハル○兩鼻孔外壁ニ浴ヒテ骨アリ彎曲ス之ヲ甲介骨ト謂フ○上顎内穹隆ノ後部ニ口蓋骨ナル者アリ一對是亦本圖中之ヲ見ルヲ得ス此故ニ頭及顔ノ骨ハ其麗甚多クシテ單骨ナリ

但_レ兩骨一片各相對シテ位スル者多シ總計二十
 二骨相依リ相結ヒ以テ貴要ノ造構ヲ呈シ巧ニ
 空竅ヲ設ケ以テ室ヲ爲シ五ニ相通ス乃チ頭蓋
 骨中ノ小區ナリ但シ骨ノ用ハ五ニ相須テ以テ
 成ル必シモ一室ノ爲メニ成ル者ニ非ス其最モ
 大ニシテ要ナル者ハ腦髓ヲ包藏スルノ室是ナ
 リ而シテ其上穹及ヒ側面ノ骨ハ胡蝶骨及ヒ篩骨
 ト共ニ結構シテ頭蓋ノ骨ヲ全成ス_{一、二、三、四、}
 符號ヲ視テ知ル可シ
 口ヲ顔面ニ開クノ小孔一半ハ頭ノ骨ヨリ成リ

一半ハ顔ノ骨ヨリ成ル即左ノ如シ

イ 眼窠即眼球ヲ藏ムルノ孔

ロ 鼻竅即錐狀骨ノ分界ニ因リテ五ニ相隔
ハチ、ア、チ
 ツルノ孔

ハ 口即齒牙アリ以テ之ヲ掩フノ孔

脊椎ハ二十六骨相重層シテ成ル其最下ノ二骨

ハ初生兒ニ在リテハ分レテ數枚アリ長育スル
ウ、レ、ク、テ、ノ、ニ、ド、モ

ニ隨ヒ合シテ一枚ト爲ルノ故ヲ以テ之ヲ名ケ
 テ假推ト曰ヒ及、符、號其他ハ總テ之ヲ真推ト曰

フ○脊骨ヲ指シテヴルテブラト謂フ此語原羅

向ノ動詞ボルトヨリ出ヅ蓋シボルトハ廻轉ノ
義ナリ如何トナレハ身ヲ動揺スレハ則諸椎之
ニ應シ翕然トシテ廻轉スルヲ以テナリ

○真椎ノ數二十四枚之ヲ分チテ三部ト為ス

12 頸椎 七枚

13 脊椎 十二枚

14 腰椎 五枚

又須ク第五圖ヲ參觀スヘシ

○成人ニ在リテハ二骨ヨリ成ル呀ノ假椎總
テ之ヲ孟骨ノ推ト云フ之ヲ分テハ左ノ如

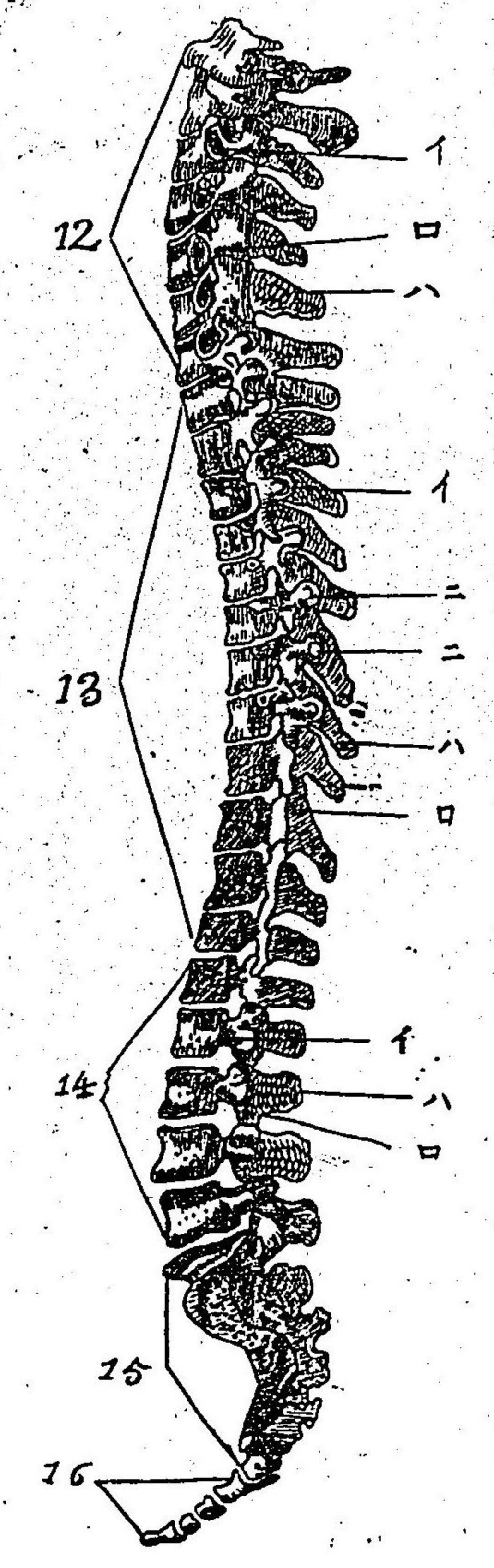
15

16

薦骨 センゴツ 尾骶骨 ビライゴツ ○動物長尾ヲ存スル者ハ此骨ノ
長キヲ以テナリ

第二圖ハ脊椎ノ側面ナリ每椎間小隙アリ離ル
、如シ而メ此ニ靱帶狀ノ小板アリ以テ之ヲ填
塞ス此ヲ椎間質ト曰フ其質頗ル彈力アリ今此
圖中背椎第十第十一第十二及ヒ腰椎第一ハ脊
骨内ニ存スル呀ノ管ヲ視セシムルカ爲ニ其側
面ヲ割開ス

第二圖



脊椎ヲ裝成スルノ每椎ハ突起シテ頗ル強固ナ
リ乃チ **イ** **ト** **ハ** **ト** **ハ** 筋ノ以テ附着スル所 **ロ** **ハ** 突
起スル者其上下ニ在リ互ニ相關涉シ以テ骨節
ノ聯續ヲ助ク **ニ** **ノ** 滑面ハ肋骨依附スルノ處ナ

リ而シテ其突起スル者各々名アリ

イ **イ** **イ** 横突起

ロ **ロ** **ロ** 關節突起

ハ **ハ** **ハ** 棘状突起

○脊椎ヲ指シテ棘柱ト稱ス、
ルハ即此棘アルヲ以テナリ脊ヲ撫擦
スルニ此者皮下ニ在リテ明カニ之ヲ
探認スヘシ

ニ **ニ** 横突起ノ滑面

脊椎ハ軀幹ノ長ニ稱ヒ其上端ハ頭顱ヲ戴ク○
方今ノ解剖家以爲頭顱ノ骨ハ脊椎ヲ裝成スル

ノ骨ト作用相同シト然凡其形狀位置兩ナカラ
 異ナルヲ欺ノ如シ心匠懇到ニ之ヲ學フニ非ル
 ヲリハ誰カ能此一様ナルヲ洞察セン今夫頭顱
 骨ト脊骨トハ實ニ是同系ニ屬ス何則其狀齊シ
 ク空竅ヲ為シテ腦脊ノ外壁ヲ為シ内ハ其髓ヲ
 包藏スルヲ以テナリ蓋シ頭蓋骨ノ大ナル脊骨
 ニ倍蓰スルハ必竟腦體ノ巨大ナルカ故ノミ
 人ノ骸骨ハ直立ニシテ頭蓋及脊骨ノ地面ニ運
 動スルヤ固ヨリ直角ヲ為ス今之ヲ伏シテ以テ
 地平ト為セバ則其骨格ノ景況猶他ノ脊椎動物

ト髣髴タリ若シ然ルキハ則骨ノ中軸變換シ自
 餘遠邇ノ諸骨皆此ニ繫連シテ關係其宜キヲ失
 ハス兩側各十二左右合シテ二十四枚ノ肋骨後ハ
 脊椎ニ附着シ前ハ胸骨¹⁷ニ附着シ而メ上肢ハ
 胸骨ニ結フ所ノ肋骨ニ係リ下肢ハ脊椎ノ下端
 即假椎ニ結フ所ノ腕骨ニ繫ル是其宜シキヲ得
 ル所以ナリ
 諸般ノ乳養動物禽鳥洵洵蟲及ヒ魚類ハ皆脊椎
 ヲ存ス此故ニ解剖家同シク之ヲ脊椎動物ノ中
 ニ撰取シ以テ類聚スルニ至ル

○胸部ニ属スルノ骨左ノ如シ(第一圖ヲ見ヨ)

胸部ハ許多ノ骨ヨリ成ル前ニ胸骨アリ兩脇ニ

肋骨アリ

17 胸骨(ステルニム)

18 肋骨(リツブ)

肋骨ハ兩脇各十二枚後ハ脊椎ニ聯着シ前ハ胸骨ニ接続ス但其最下ニ在ル者各二枚ハ短ニシテ胸骨ニ接続セズ故ニ之ヲ浮肋ト曰フ肋ノ胸骨ニ接続スルノ際頭ハ弾力質ノ軟骨ヲ以テ成ルウノ符跡是ナリ

○上肢ニ属スルノ骨左ノ如シ(圖中ノ左上)

19 胸ノ上縁骨、鎖骨(クモクル)

20 肩ノ骨、肩胛骨(スカヒエーラ)

21 上臂ノ骨、肱骨(ヒューモルス)

22 下臂内側ノ骨、尺骨(ユルナ)

23 下臂外側ノ骨、桡骨(ラージユス)

○手骨ヲ分テテ三部ト爲ス其數殊ニ多シ(圖中ノ左手)

24 腕關節ノ骨、腕骨(カーパルボーン)

25 掌ノ骨、掌骨(パーム)

26 指ノ骨、指節骨(スランギス)

腕關ノ骨ハ其數八個ニシテ骨中ノ最小ナル者ナリハ骨駢列シテ二層ヲ爲ス前後層共ニ四骨其目左ノ如シ(圖中ノ右手ヲ見ヨ)

- イ 舟狀ノ骨、シラコツ (スカホイド)
- ロ 半月狀ノ骨、シラコツ (セミリール)
- ハ 楔狀ノ骨、クワダコツ (キユーラール)
- ニ 豆狀ノ骨、トウコツ (ピシラール)
- ホ 面多クシテ大ナル骨。大稜骨(トスヘーヂユ)
- ヘ 面多クシテ小ナル骨。小稜骨(トスヘーグイド)
- ト 八骨中最大ノ骨。腕關大骨(オスマグニム)

チ 鉤狀ノ骨 鉤骨(ユンシラールム)

掌骨ハ掌ノ筋肉中ニ在リ其數五枚指骨ハ十四枚乃チ豆指ヅシハ獨リ二枚其他ノ四指ハ各三枚之ヲ區別ノ第一指節骨第二指節骨ト名ソク

骨數及ヒ關節ノ叢簇スルハ總テ之ヲメ委曲ノ運動ニ適應セシムルカ爲メナリ手腕ノ如キハ最モ然リトス

○下肢ニ屬スルノ骨左ノ如シ

- 27 腕ノ骨、ムネイコツ 無名骨(インノミチートホーン)

腕骨ノ兩側後ハ薦骨ニ附着シ前ハ相共ニ結合
シ以テ骨鈎ヲ下體ニ作ル

腕骨ハ是ヲ細別ノ三トナス左右高ク聳ヘ
タルノ部ハ之ヲ腸骨ト曰ヒ坐ノ席ニ觸ル
、ノ部之ヲ坐骨ト曰ヒ陰部ニ横タハルノ
骨之ヲ恥骨ト曰フ

此骨鈎ノ空竅之ヲ孟ト稱シ又骨盤ト曰フ
等ノ如キ緊要ノ機關ヲ其中ニ藏ノ腕骨ノ廣板
以テ外来ノ損害ヲ防護ス

○腕骨ノ兩側ニ附接スルノ骨左ノ如シ

28 膝ノ骨 大腿骨(フェモル)

○漸ク下リテ脚ヲ爲ス者左ノ如シ

29 膝ノ血狀ノ骨 膕骨 (パテルラ)

30 脚ノ内側ノ骨 脛骨 (チビア)

31 脚ノ外側ノ骨 腓骨 (フィビウラ)

○足ニ属スルノ骨ハ手骨ト同一般ニメ亦之
ヲ分チテ三部ト爲ス即左ノ如シ

32 踵部ノ骨 内跗骨(タルシユス)

33 跗ノ前部ノ骨 前跗骨(メタルシユス)

34 足指ノ骨 趾骨 (スランギス)

○内跗骨ハ九テ七枚相合メ成ル又之ヲ分ツ
トキハ則其目左ノ如シ

イ 鉤状ノ骨

距骨 (アストラガリユス)

ロ 踵ノ骨

踵骨 (カルカ子ユム)

ハ 舟状ノ骨

舟骨 (スカフライド)

ニホへ 楔状ノ骨三枚。楔状骨(キョーテラアルム)

ト 骰子状ノ骨 骰子骨(キョーボイド)

前跗骨之ヲ分ツキハ五枚ニメ趾骨ハ十四枚ナ
リ四趾各三枚ニメ大趾獨リ二枚

人體ノ量重クメ其位置ハ則直ナリ足骨其底面

ニ在リテ能ク之ヲ^{サテ}支持シ其彈カヲ以テ體ノ俯

仰運動等ニ適應ス○人能ク注意ノ足ヲ檢スレ

バ則此ニ二ツノ穹窿アリ脚面後ヨリ前ニ至ル

者一ツナリ即跗骨ヨリ趾ニ至ルノ弓形是ナリ

脚掌個位ヨリ那位ニ至ル者一ツナリ即足心是

ナリ之ヲ横弓ト名ヅク○諸骨ノ装置曲ケテ穹

窿ヲ為ス者及ヒ諸關節接續ノ間ニ所謂軟骨ナ

ル彈力的質ヲ以テ之ヲ被フ者之ヲ全軀ニ比較

スルニ足ヲ以テ最モ之ニ富メル者ト為ス

人ノ頭蓋及ヒ脊椎ハ体ノ中軸ニシテ重心直線ナ

リ設シ之ヲ匍匐セシメテ以テ地平ニ置ケバ則
 四肢其體軀ニ懸ルノ定規ヲ失ノ中軸變移ス此
 態ノ運動ハ造物一種ノ目的ニシテ四肢ニ賦與ス
 ル力ノ副任ナリ此レ四肢ヲ以テ身軀ノ附屬物
 ト名ツクル所以ナリ

人ノ臂ハ椎ノ上端ニ懸リ脚ハ其下端ニ出テ其
 骨形頗ル共ニ相類似ス鎖骨及ヒ肩胛骨ハ以テ
 腕骨ニ比スベク臑骨ハ以テ大腿骨ニ比スベク
 膊骨ハ以テ脚骨ニ比スヘク就中桡骨ハ脛骨ニ
 比シ尺骨ハ腓骨ニ比ス腕關節ノ骨ハ以テ跗關節ニ

比スベク掌骨ハ以テ跗骨ニ比スベク指モ亦相
 似テ手ノ五指ハ猶足ノ大趾ノゴトシ更ニ之ヲ
 比較スルニ掌骨ハ以テ内ニ屈シ五指ハ諸指ノ最
 内ニ在リ其位置大趾ト一般ナリ如何トナレハ
 則掌ハ手ノ面ニ足心ト齊ク手背ハ猶脚面ノ
 如キヲ以テナリ解剖學家諸動物ノ造構彼此相
 齊シキ者ヲ論定メ之ヲ法ホモロギア莫羅モロ懸ロ造構相齊ト稱
 ス

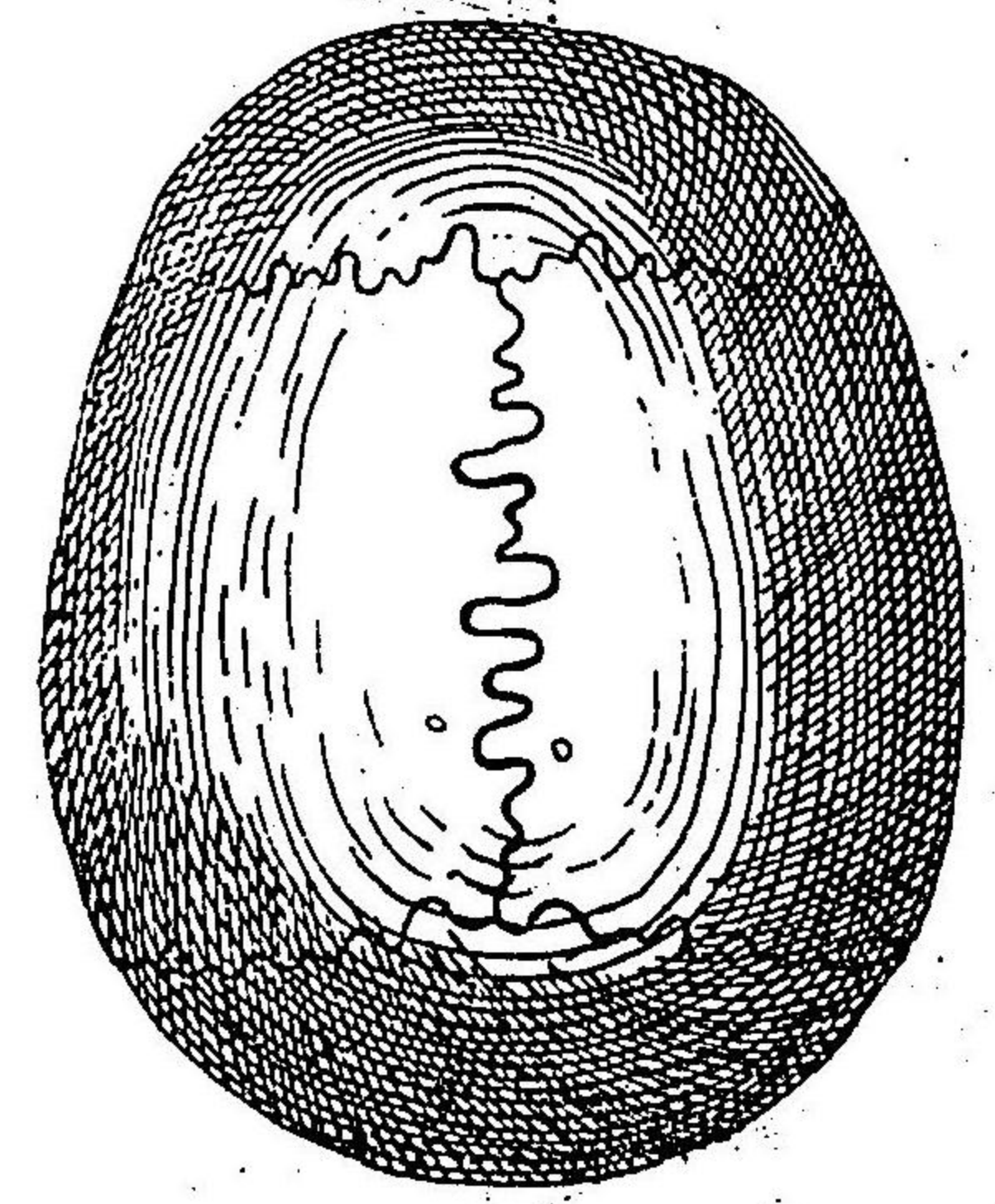
骸骨ヲ裝成スル所ノ骨ハ生活ノ時期ニ隨ヒテ
 其數自ラ異ナリ小兒ニ在リテハ諸骨多クハ尋

常ノ骨ニ非スメ概子柔軟ノ質即軟骨ヨリ成リ
 年齢稍長スルニ從ヒテ其質漸ク堅硬ニ變シ以
 テ尋常ノ骨ト為ル此ニ骨アリ漸次ノ變化ヲ營
 ムハ容易ニ之ヲ目撃スベシ縱令ハ腕骨第一圖
 符ハ三枚ニメ其間ニ軟骨アリ之ヲ結接シテ漸
 ク骨化ス然レ骨素徐々ニ此軟骨中ニ沈着シ長
 メ大人ト為ルニ至リテハ遂ニ硬化ノ單純ノ形
 質ヲ致スナリ但シ今預メ骸骨ヲ通算メ二百枚
 ノ骨ト為ス

第三圖ハ骨形ヲ示スモノナリ第一圖ニ於テ諸

部骨格ノ形狀自ラ別アルヲ示ス
 頭顱ヲ形成スルノ骨ハ其廣寬ナル面ヲ覆フガ
 為ニ^{ヒラシキ}區平ヲ成ス故ニ之ヲ平骨ト名ヅク頭骨

第三圖



ハ擁護ノ用ヲ為シ外
 ハ筋アリ此ニ附着シ
 内ハ空竅ニシテ以テ
 腦髓ヲ抱藏ス此骨兩
 面アリ外凸ニ内凹
 全形彎屈ス
 幾多ノ骨邊相縫合シ

テ一ツノ如ク鮮滑ニシテ磨スルカ如シ而ノ其
 連接ノ處ハ參差タル鋸齒互ニ相啣ミテ微細ノ
 間隙ヲモ遺サズ容易ニ之ヲ離割スヘカヲサル
 一猶良匠製スル呀ノ鳩尾形接合ト一般ニノ猶
 之ニ勝ル者ナリ宜ク本圖ヲ照ノ之ヲ觀ルベシ
 頭骨ノ裝成精緻ノ縫合ヲ爲ス一斯ノ如クニノ
 以テ障壁ヲ作りテ其空竅ヲ保チ貴重ニノ精靈
 ナル腦ノ機關ヲ保攝衛護シ之ヲノ壓搾セザラ
 レム非常ノ打撲ヲ受クルニ非ル自リハ之ヲ損
 害スル一極ノテ難シ頭骨ノ彎曲ノ穹隆ヲ爲ス

者亦外来ノ打傷ヲ防禦スル所以ナリ
是圓壘ハ
ガスルニ破碎シ易カラ
ザルト同一理ナリ
 四肢ニ在リテ切要ナル骨ハ圓ニノ長ク以テ大
 ナル運動ノ用ニ適應ス此骨ヲ長骨ト名ク更ニ
 之ヲ比較スルニ臂骨ハ短ク脚骨ハ長シ又之ヲ
 同部ニ觀ルニ上部ノ骨即上臂骨及ヒ下部ノ
 骨即尺骨桡骨ト脛ヨリモ長シ而ノ長骨ハ軸即
 幹アリ又兩端アリ幹ハ骨ノ長大部ニノ殆ント
 圓柱狀ヲ爲ス其中部ハ最狹隘ニノ其兩端ハ漸
 ク廣寬以テ他骨ト相支ユ故ニ之ヲ支點ト言フ

此ニ附着スル所ノ筋ハ縮張ノ以テ其關節ヲ運
 轉屈伸ス
 脊椎手節骨足跗ノ如キハ固ヨリ長大ノ運動ヲ
 要セザルノ部ナルヲ以テ其骨短小ナリ之ヲ短
 骨ト名ツク

骨徴

諸般ノ骨ニ於テ其外面ヲ檢點スレハ則各處ニ
 質粗糙ニノ隆起スル者若クハ凹窪ナル者アリ
 テ一ニ非ス此者體ノ諸部ニ在リテ各其名稱ヲ
 存ス

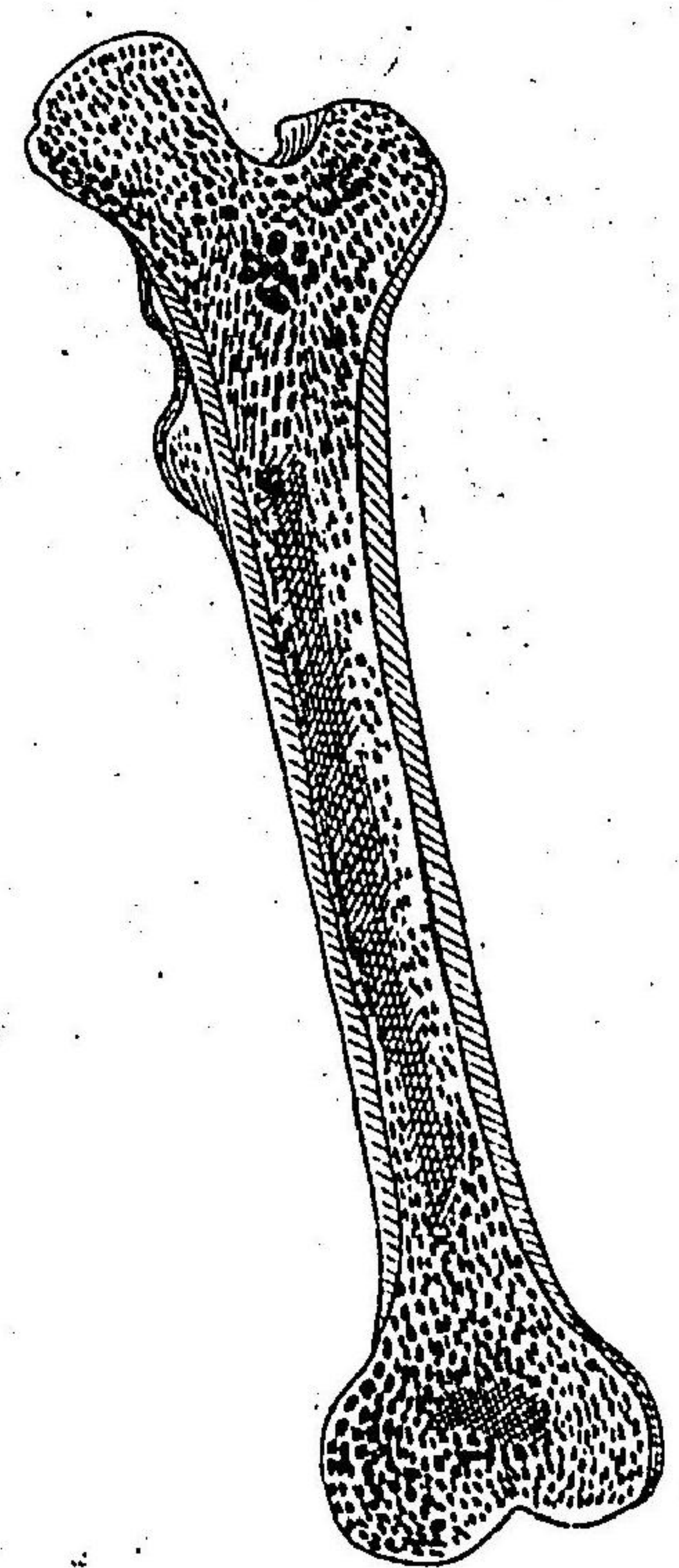
股骨ノ上端突起アリ之ヲ球ト名ツク第一圖 腕
 骨ノ上端ニ在リテハ之ヲ結節ホト名ツク結
 節ニ倍ノ猶長ク突出スル者之ヲ棘ト曰フ棘ハ
 脊椎ニ於テ最モ顯著ナリ第一圖ノ此等ノ名ヲ
 存スル所ノ種々ノ突起ハ即種々ノ筋ノ附着ス
 ル所ナリ故ニ其隆起ノ大且厚ハ每ニ必ス筋ノ
 大且強ニ關係ノ其用ヲ為スナリ又他ノ突起ア
 リ此骨彼骨ト相接着スル所ノ骨端ニ於テ之ヲ
 見ル此者次件ノ名稱ヲ存ス
 股骨及ヒ腕骨ノ上圓端ハ之ヲ頭ト稱シ骨頭骨

幹ト相接ノ收結スルノ部之ヲ首ト曰フ此骨ノ
 下端膨脹スル者第一圖ヲ兼ト名ツク脚ノ二骨
 ノ下端ニ在リテ突起スル者^{ヒロガシ}チ^チ之ヲ槌ト稱ス
 兩骨上下相联接シ骨頭嵌^{ハヤル}入スルノ處ハ必ス凹
 窪ヲ為ス即關節ニ在リテ他骨其中ニ放寬運轉
 スルニ適スル者ナリ此故ニ股骨頭ハ腕骨ノ深^シ
 窩ニ入ル此ヲ髀臼^{ヒキ}ト曰フ腕骨頭ハ^{ヒキ}又^{ヒキ}ト稱
 スル處ノ淺窪ニ嵌入ス其位置機關此ノ如クニ
 メ骨端相應シ以テ巨細適度ノ運動ヲ為ス
 更ニ小ナル孔溝窪アリ諸骨ノ上ニ在リ以テ^{ヒキ}

ヲ維キ以テ神經若クハ血管ヲ通ス○此故ニ腕
 骨ノ前部ニ在ル所ノ溝^ルハ其筋^ニ頭^ト為リ
 テ之ニ入ルノ處ナリ此筋ハ曲折ノ前腕ニ至ル
 者ナリ○顔面ノ骨ニ於テ多ク見ル所ノ小孔^リ
^リハ神經及ヒ血脈ヲ通ス○前腕ノ骨ノ前部ニ
 見ル所ノ小孔^ワ^ワハ小血管ヲ骨内ニ通スルノ
 路ナリ
 第四圖ハ骨ノ造構肉眼ヲ以テ之ヲ觀ル者
 此ニ長骨アリ之ヲ縱斷スレハ其内部以テ觀ル
 可シ今本圖ニ揭示スル所ノ者ハ即股骨ヲ縱斷

スル者ナリ
是ニ於テ知
ル可シ骨ハ
其内部盡ク
空洞ナル管

第四圖



ニモ唯其端ニ通ゼサルノ此空洞ヲ髓管ト名
ツク管内ニ液アリ質軟色黄ニノ油ノ如シ是即
髓ナリ骨端管ヲ為サ、ル部ハ内ニ小骨板アリ
相重襲シ以テ精美ノ網狀ヲ成ス而メ此骨板ノ
位置ハ專ラ直線ニノ板間小孔アリ通メ以テ海

綿質ヲ為ス故ヲ以テ之ヲ海綿骨ト曰フ此間隙
ハ亦髓ヲ貯フルノ處ナリ○骨ノ外層ハ周圍全
ク緻密ニノ間隙ナキノ組織ヲ存シ以テ堅韌ノ
質ヲ保ツ軸ハ端ニ比スレハ則其質ノ堅牢益著
シク且厚シ○長骨ノ素ハ輕強ニ質ヲ存ス蓋シ
強固ニノ輕便ナルハ骨素裝成ノ要的ナリ骨幹
ノ中心管ヲ為スノ部ハ新鮮ノ髓ヲ以テ填充ス
故ニ其質ハ強固ナリト雖氏其造成反テ輕鬆ナ
リ○骨端ハ脹大ニノ其面廣ク以テ關節ヲ為ス
但其骨質海綿狀ヲ為ノ輕キノ故ヲ以テ固ヨリ

脹大ナリト虫モ運営ニ妨ケ無シ

更ニ平骨ヲ横斷スレハ緻密組織ニ層ヲ爲シ中

間ニ髓液ヲ含有スルノ質アリテ之ヲ見ルヲ得

ルナリ頭蓋骨ノ如キハ其著シキ者ニノ其内層

ハ外層ニ比スレバ薄クノ脆シ其中間ノ質ハ殊

ニ軟薄ナリ之ヲデプルート曰フガパールハ中間海綿質ノ謂

諸平骨ノ中ニ就テ二層ノ分界最モ顯著ナル者

ハ前額骨是ナリ此骨下リテ鼻孔ヲ作シ氣息ヲ

通スルノ處ニ於テ罅隙コキヤヲ爲ス甚タ大ニメ且廣

前層ハ高ク出テ以テ眼窠ニ至ル其高ク眼窠ニ

及ブノ状ハ第一圖カニ於テ之ヲ示シ其罅隙ハ

第七十圖及此第七十一圖ニ之ヲ示シ併セテ感

覺ノ機關ヲ載ス此罅隙ハ之ヲ名ツケテ前頭竇

ト曰フ小兒ニ在リテハ此竇著シカラス是其前

頭殆ンド匾平ニノ隆起ヲ爲シテ離開スルニ至

テサルヲ以テナリ幼年期ニ至リテ始テ僅ニ之

ヲ形成シ壯年期ニ至リテ漸ク増進ス其勢顯然觀

ル可キ者ハ其人必ス身心健ニノ才智明カナル

ヲトスルニ足ル○短骨ノ海綿質ハ組織ノ内部

ハ生理學

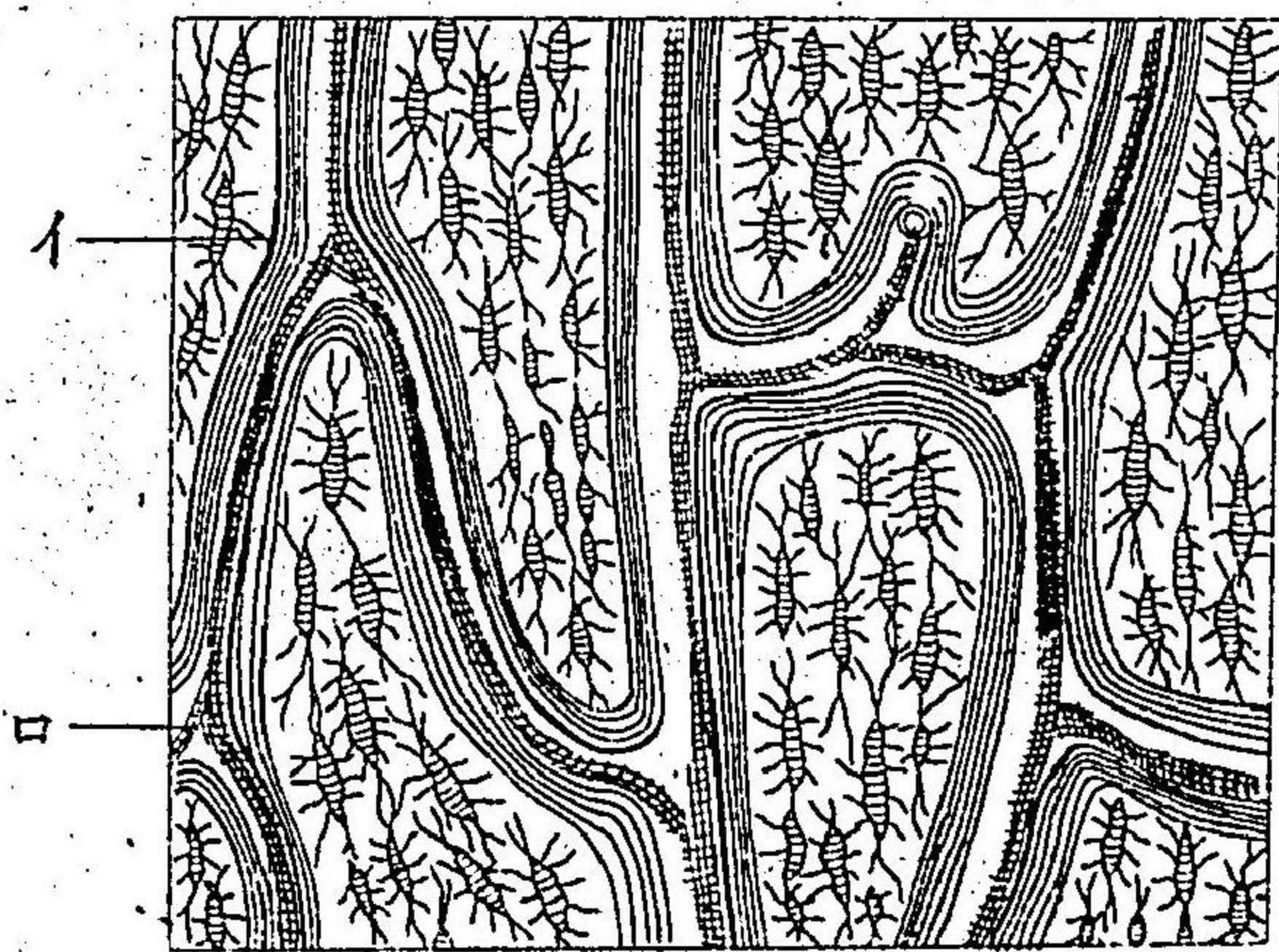
世二 集英堂出版

ニ在リテ外部組織ノ密ナル度ハ猶長骨ノ端ノ
ゴトク一般ナリ

第五圖 ハ骨ノ造構顯微

鏡ヲ以テ之ヲ覽ル者
骨ノ造構肉眼ヲ以テ之
ヲ觀レバ則小孔^{ムラガリ}叢簇シ
テ穿開ス今之ヲ縱斷メ
稍高厚ナル一片ヲ取り
テ顯微鏡ノ下ニ安置シ
以テ之ヲ照覽スルニ肉

第五圖



眼ニ見ル所ノ小孔ハ即大小ノ管ニメ小ナル者
ハ殊ニ多シ是皆緻密組織ノ骨中ヲ通徹直行ス
ル者ナルヲ察知ス可キナリ此管又横枝ヲ生メ
互ニ相通ス本圖ニ就テ之ヲ觀ル可シ

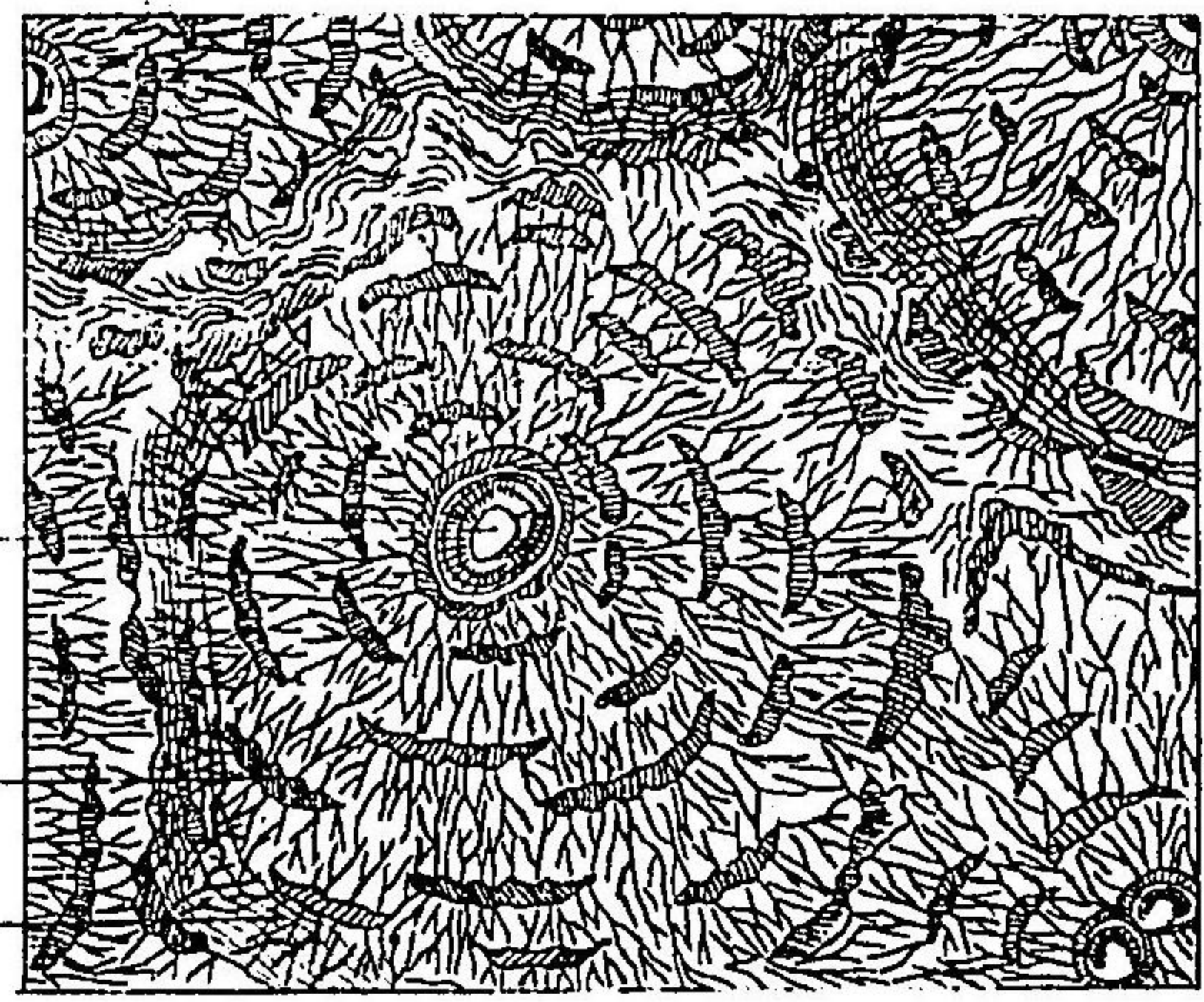
イ ハーヴァーシアン管

ロ ハーヴァーシアン管内ノ脈管

嘗テ解體ノ名家ヘトヴァース氏ナル者アリ始テ
此管ヲ發明ス後人之ニ命スルニ其名ヲ以テス
此管諸骨ノ堅硬組織中ヲ穿テテ細密ノ脈管ヲ
通シ血ヲ送輸シ以テ其適宜ノ量ヲ得ヒシム諸

般ノ骨其疆界部ト關節部トヲ除クノ外ハ骨膜ト稱スル呀ノ強性ノ膜ニ因リテ之ヲ圍包ス脉管此膜ヨリ骨ノ外面ニ在ル呀ノヘーヴーシアン管口ニ入り緻密ナル骨ノ組織中ニ亘リ漸ク支分ノ漸ク細小ト爲リ遂ニ^{イラビ}カス^カ微見ル可カラサルニ至ル但ヘーヴーシアン管ヲ抱ク呀ノ骨ノ組織ハ實ニ細密ニシテ血管ノ通過ヲ許サ、ルノミナラズ一滴ノ血液モ亦其中ニ運輸ス可カラサルノ質ナリ然レドヘーヴーシアン管獨リ能ク此麗美緻密ノ骨質中ニ穿通シ骨ヲノ能ク

第六圖



生活ヲ得テ永ク健康ヲ保タシメシカ爲メニ血ヲ致シ以テ榮養物素ヲ給ス第六圖ヲ参考シテ

曉知スヘシ

第六圖ハ骨ヲ横斷スル

ノ薄片ニメ第五圖ト同

等ノ度ヲ以テ之ヲ鏡下

ニ照シ張大ニスル呀ノ

形状ナリ

イハヘーヴーシアン管

ノ一ニノ其中ニ血管ヲ

保ツ所ノ截斷口ナリ之ヲ圍擁スル所ノ骨ハ層々相列ツ内ニ黠點アリ名ツケテレキネート曰フ口是ナリ其所在殆ンド定規アリ實ニ是ヲ骨中ノ空隙トナス黒線アリレキネーヨリ進ム其數大ナリスキマハヲ見テ知ル可シ蓋レ此線ハレキネー各互ニ相聯合スルノ方嚮ニ隨テ穿達スル所ノ微細ノ小管ニ之ヲケネリキネーハト名ツク此管レキネーヲ以テ中樞ト爲シ又レキネーニ隨ヒテ以テヘーヴーシアン管ニ通徹スヘーヴーシアン管中ニ横タハル所ノ血管骨ノ榮養ニ

須要ナル液ヲ流出シ此液管ニ近接スル所ノレキネーニ至ルニ小管ヲ通過ス亦他ノ小管更ニ其液ヲ此レキネーニ受ケテ以テ之ヲ他ノレキネーノ中ニ輸スル是ニ由リテ細密組織ノ全質自在ニ血ヲ以テ充實ス蓋シ骨ノ細密組織ハ總テレキネー及ヒ小管ヲ以テ抱ク所ノヘーヴーシアン管ノ數條ヨリ成ル者ト看做ノ可ナリ此故ニ此レキネー及ビ小管ノ附屬スル所ノ管ハ即之ヲヘーヴーシアン體ト稱ソ骨體ヲ説クニ必ス例ノ之ヲ其中心ト爲ス者ナリ

第三篇

關節及靱帶

第七圖 此圖ハ卷末ニ掲ク ハ成人ノ骨體ニノ全身諸骨ノ造構及其關節ノ各部ニ從ヒテ形狀ノ異ナルト靱帶ヲ以テ各骨ヲ連接スルノ形狀トヲ示ス者ナリ(小兒ノ骨ハ軟ニメ漸々化骨シ其形狀モ亦長育スルニ隨ヒテ変ス故ニ茲ニ成人ノ骨體ト去フモノハ少壯ノ別アルヲ以テ全成ノ者ヲ示スナリ)

イ 肋軟骨ヲ胸骨ニ結合スル靱帶

ロ 肋軟骨ヲ脊椎ノ前面ニ結合スル靱帶

- ハニ 肋骨ヲ棘状突起ニ結合スル靱帶
- ホ 腕骨ヲ棘状突起ニ結合スル靱帶
- ヘ 腕骨ヲ假椎ニ結合スル靱帶
- ト 腕關節ノ靱帶
- チ 下臂ノ二骨間ニ擴張スル膜
- リ 脚ノ二骨間ニ擴張スル膜即下臂ノ二骨間ノ膜ト同質ノ者
- ル 腕骨ノ孔ヲ填充スルノ膜
- オ 鉤關節ノ靱帶
- カ 肘關節ヲ靱帶

カ 膝關節ノ靱帶

ヨヨ 手指及足趾ノ靱帶

タ 腕關節ノ囊靱帶

レ 肩胛關節ノ囊靱帶

第八圖 ハ纖維膜及靱帶ヲ造成スル組織ノ白纖維相聚合スル形狀ヲ

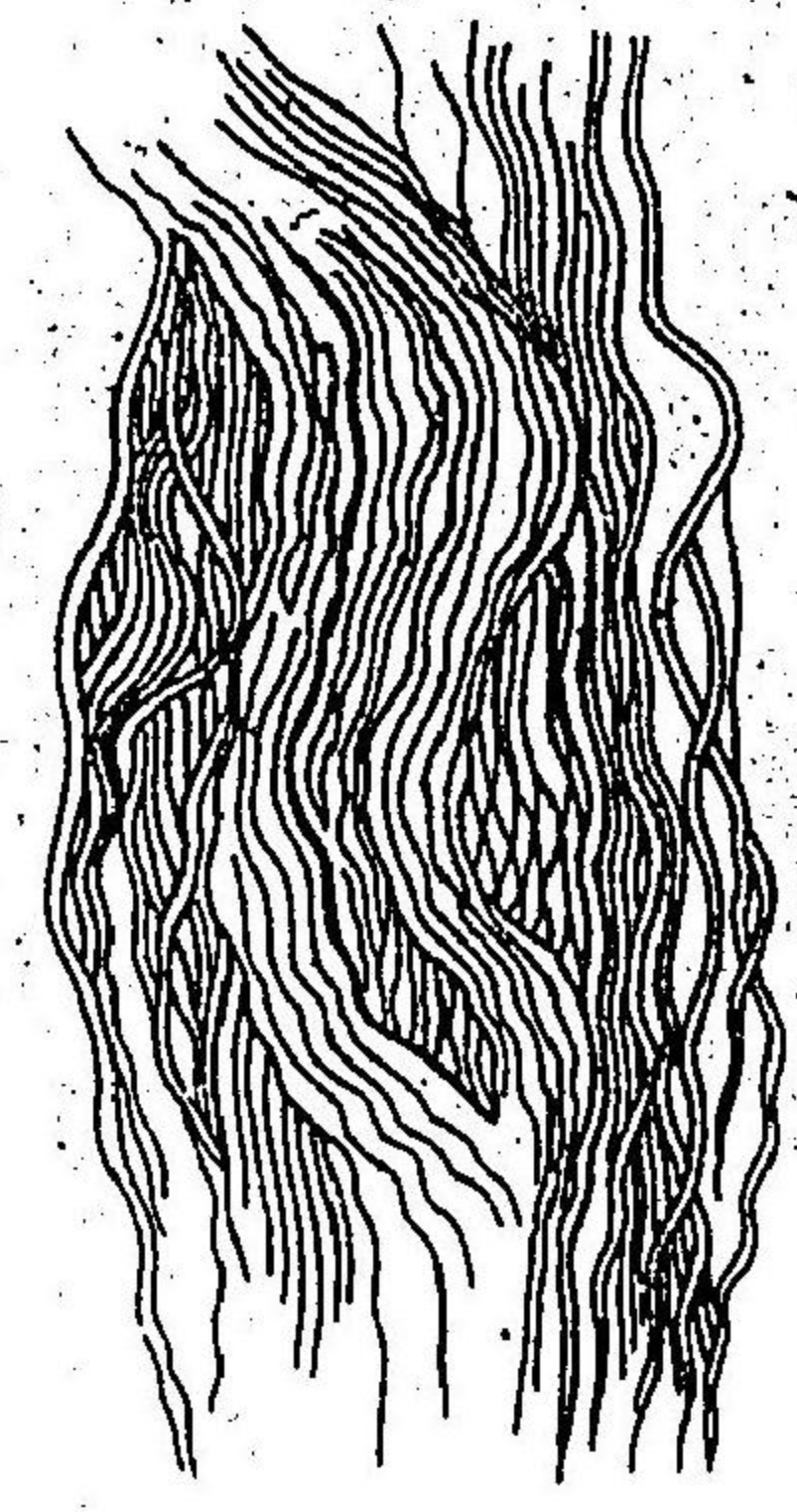
假リニ巨大トナシテ

摸寫スルモノナリ

第九圖 ハ腕關節ヲ縱

斷ニ以テ其球狀ト曰

第八圖



狀トヨリ成ルノ
摸樣ヲ示ス者ナ
リ

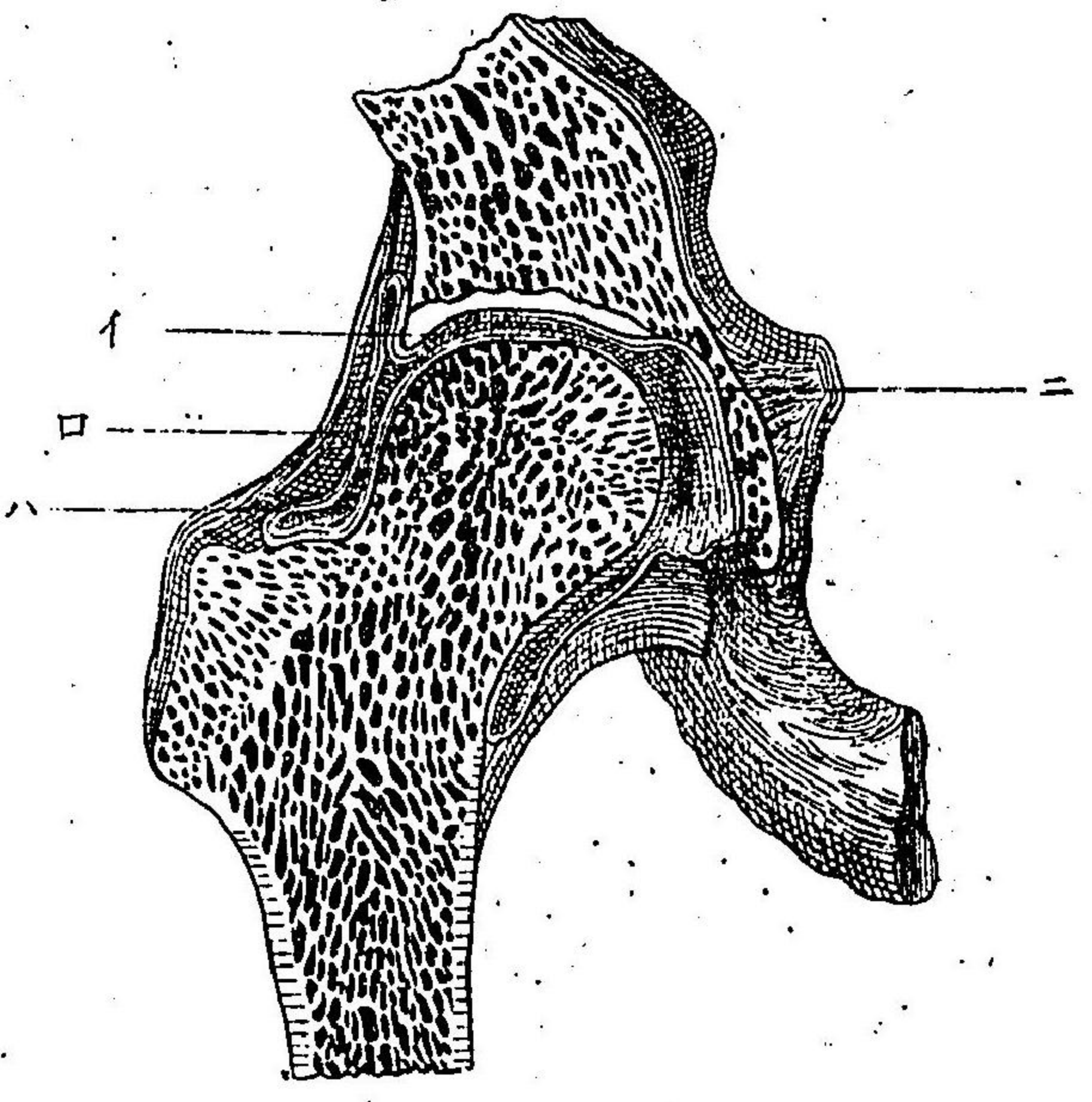
イ 關節軟骨

ロ 滑液膜

ハ 帽樣靱帶

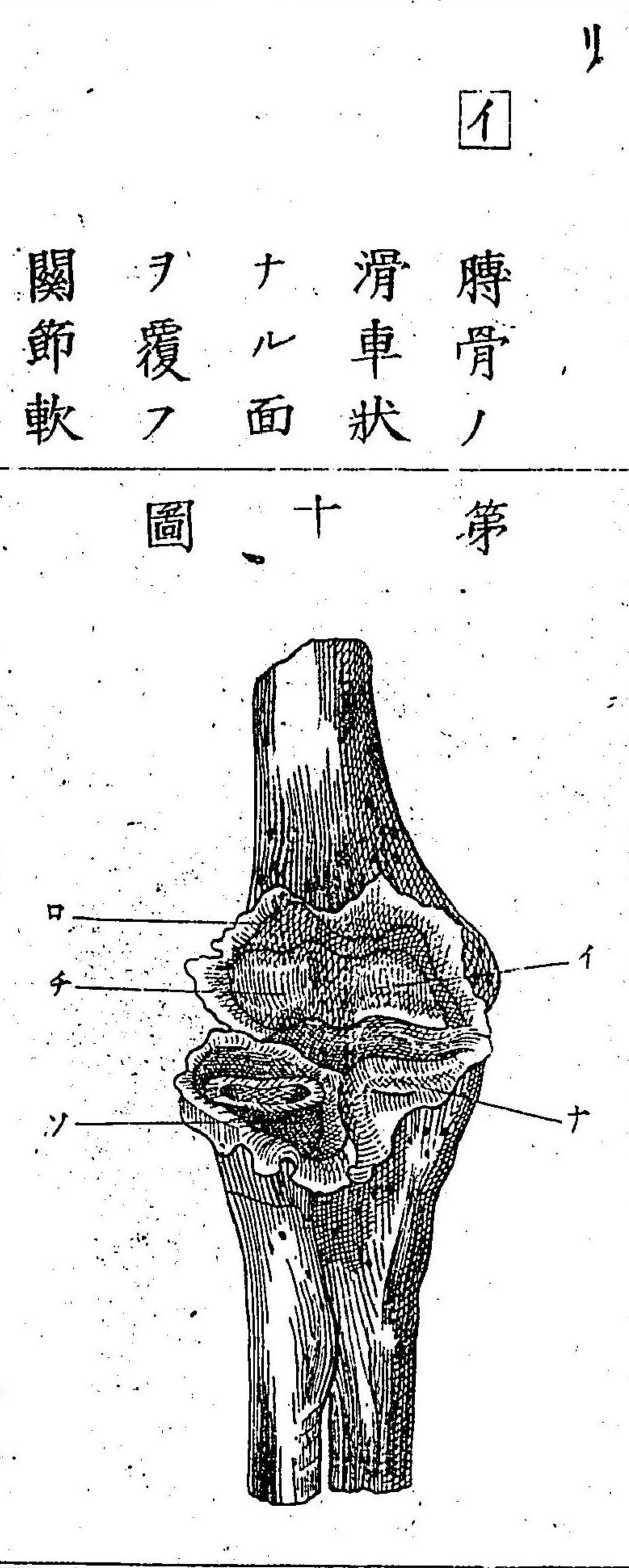
ニ 關節間靱帶

第九圖



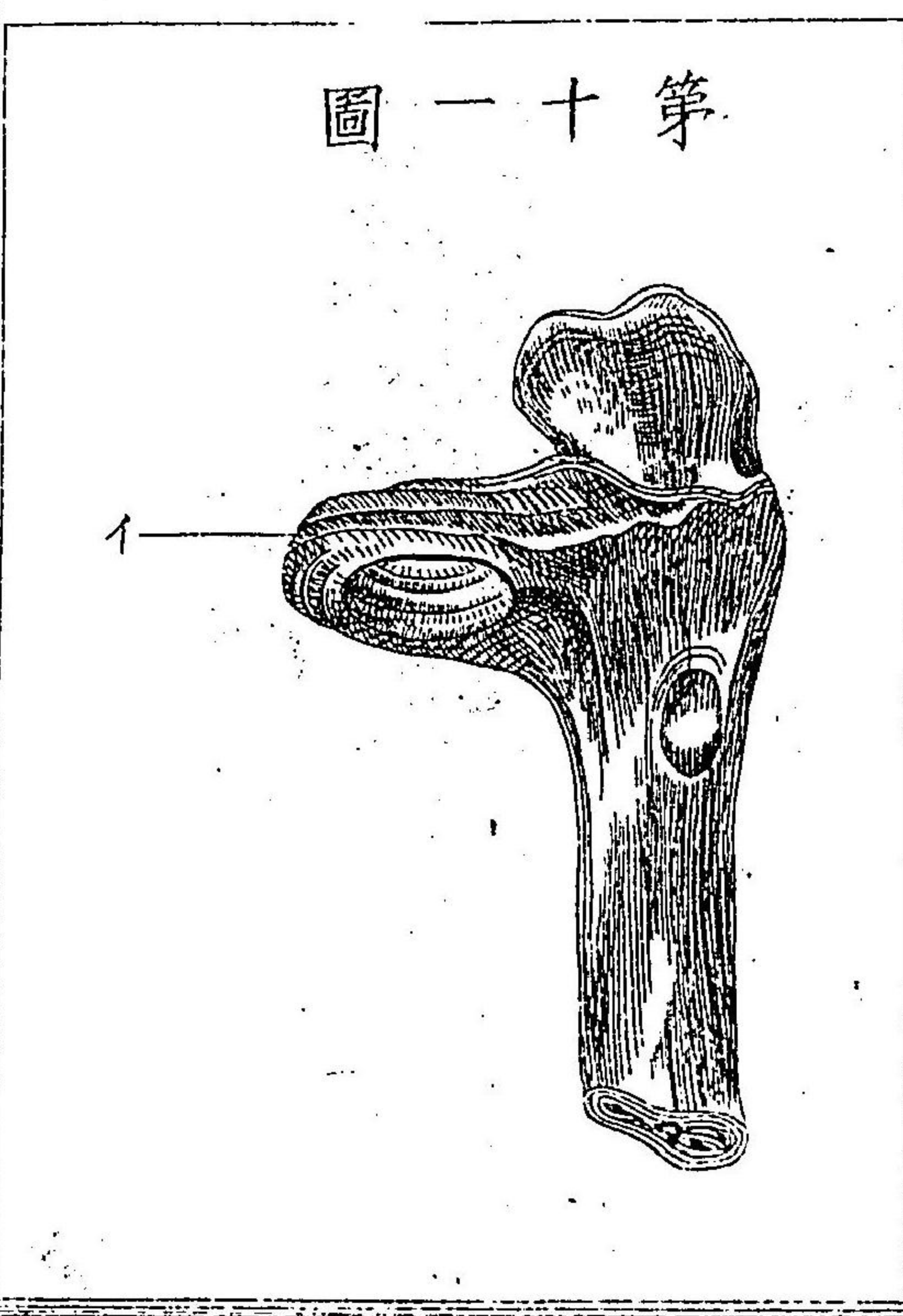
第十圖 ハ肘關節

ノ内部ヲ現シ以テ蝶鉸關節ノ造構ヲ示ス者ナ



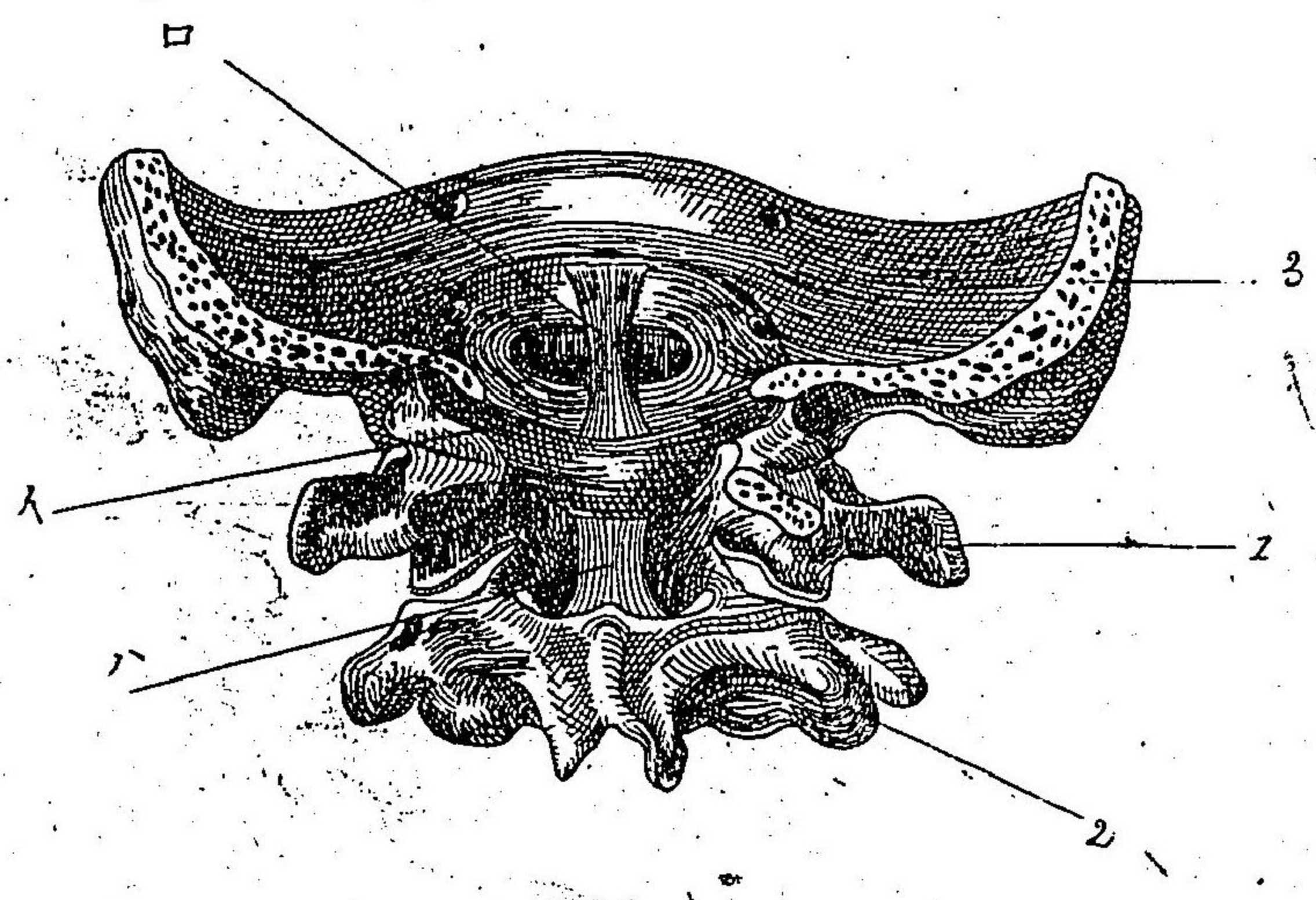
リ
 [イ] 膊骨ノ滑車状ナル面ヲ覆フ關節軟骨ナリ
 下臂ノ屈伸スル時尺骨[ナ]此ニ轉回ス
 [ロ] 囊鞞帶ノ内部ヲ覆フ滑液膜
 [チ] 膊骨下端ノ圓形ニ隆起スル者ナリ下臂

ヲ翻ヘス時挽骨此[ソ]ニ運轉ス
 [第十一圖]ハ尺骨ノ上端及環状鞞帶[イ]ヲ示ス者
 ナリ下臂ヲ翻スキ挽骨頭此ニ轉回ス
 [第十二圖]ハ後頭骨ノ一部ヲ示シ供セテ第一二
 項椎ノ髓管ヲ現ハシ以テ鞞帶各個ノ椎骨ヲ結合スルノ模様ヲ示ス
 [1] 裁域即第一推



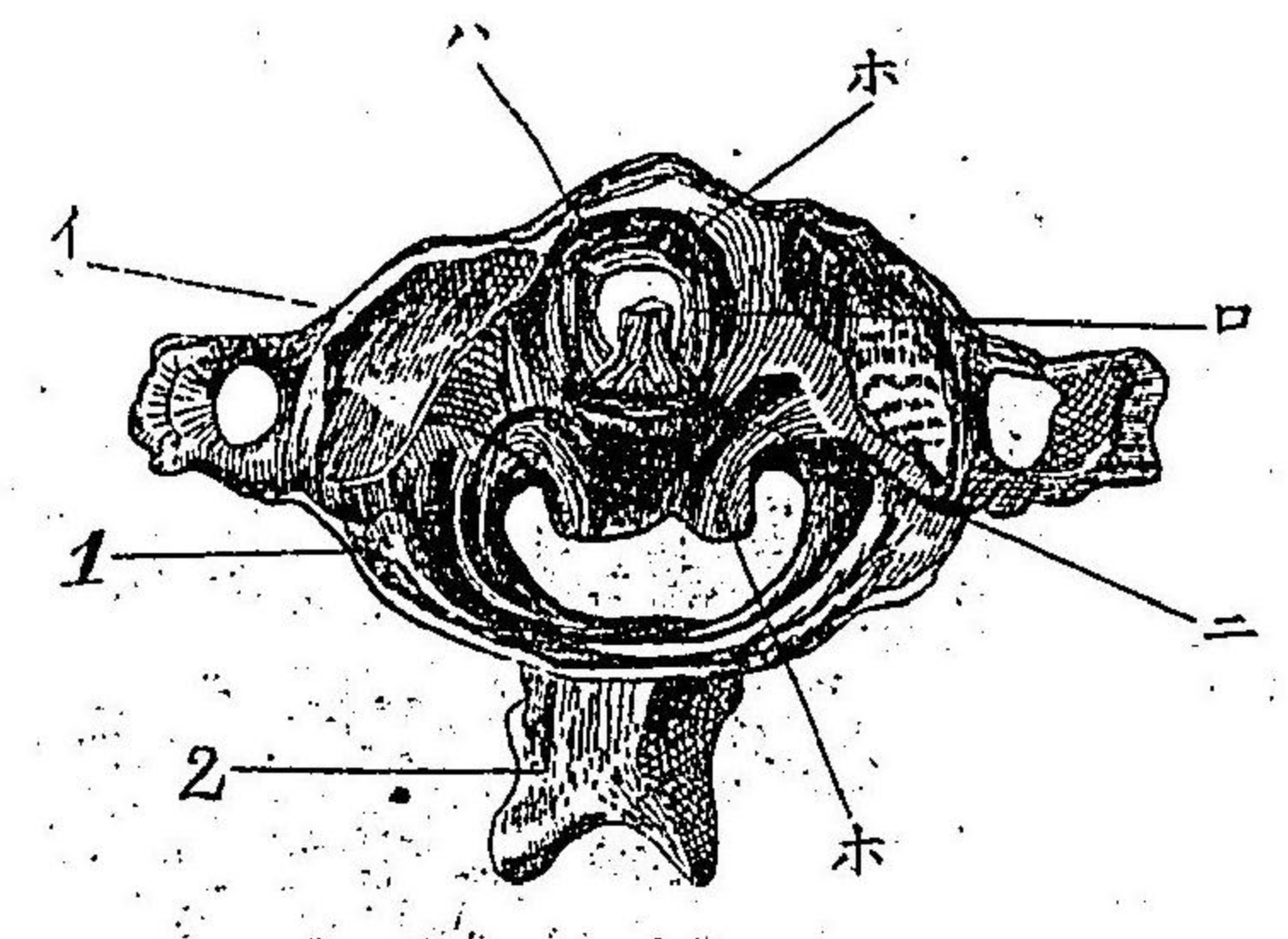
身生我解言
 考之
 第十
 九

圖二十第



第十
 九
 圖ハ後頭骨ヲ截
 離シ裁域及軸柱ノ尖頂
 部ノ骨
 後頭骨即頭ノ後
 軸柱即第二推
 部ノ骨
 横靱帶
 横靱帶延ビテ後
 頭骨ニ達スル者
 軸柱ヨリ下降ス
 ル靱帶

圖三十第



ヲ示ス者ナリ
 裁域
 軸柱
 裁域ノ平滑面
 後頭骨
 此上ニ運轉ス
 軸柱突起○頭ノ轉回ニ
 隨テ裁域此周圍ニ回ル
 裁域ノ平滑面○軸柱突起上ニ動クノ面
 裁域ノ横靱帶○此靱帶軸柱突起ノ者ヲ
 シテ固有ノ位置ニ緊著セシム

入
 三
 九
 世
 九
 集
 上
 卷
 三
 或
 反

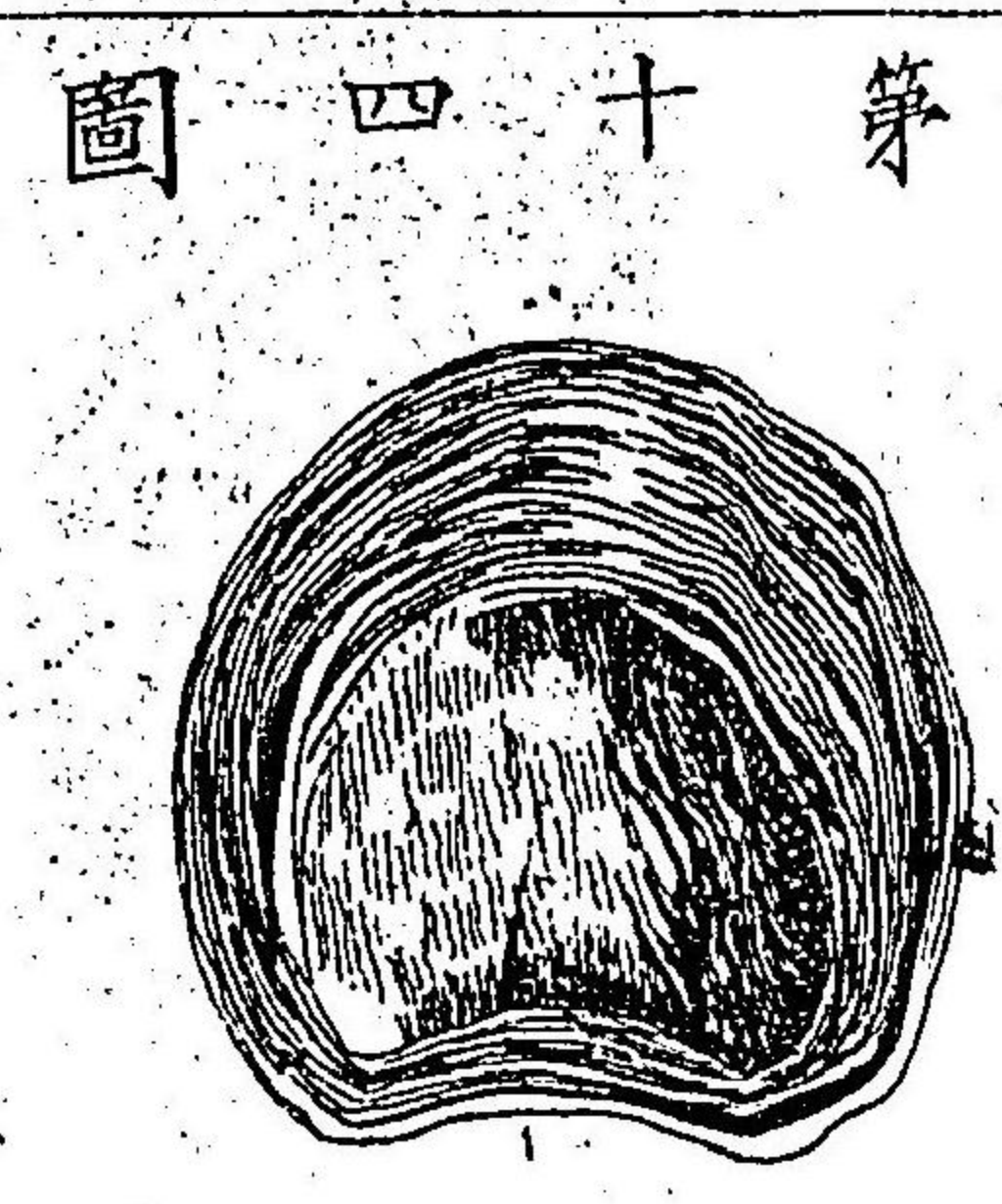
〔ホ〕 軸柱突起ノ者ト裁域及横靱帶トノ中間ニ在ル滑液膜

〔第十四圖〕ハ椎体二個ノ間ニ居テ之ヲ連結スル圓キ彈力靱帶ノ表面ヲ示ス者ナリ

〔第十五圖〕ハ連續スル椎骨ノ前面ヲ現ハシ彈力靱帶之ヲ連結スルノ模様ヲ示ス者ナリ

〔第十六圖〕ハ軟骨ノ化骨營作

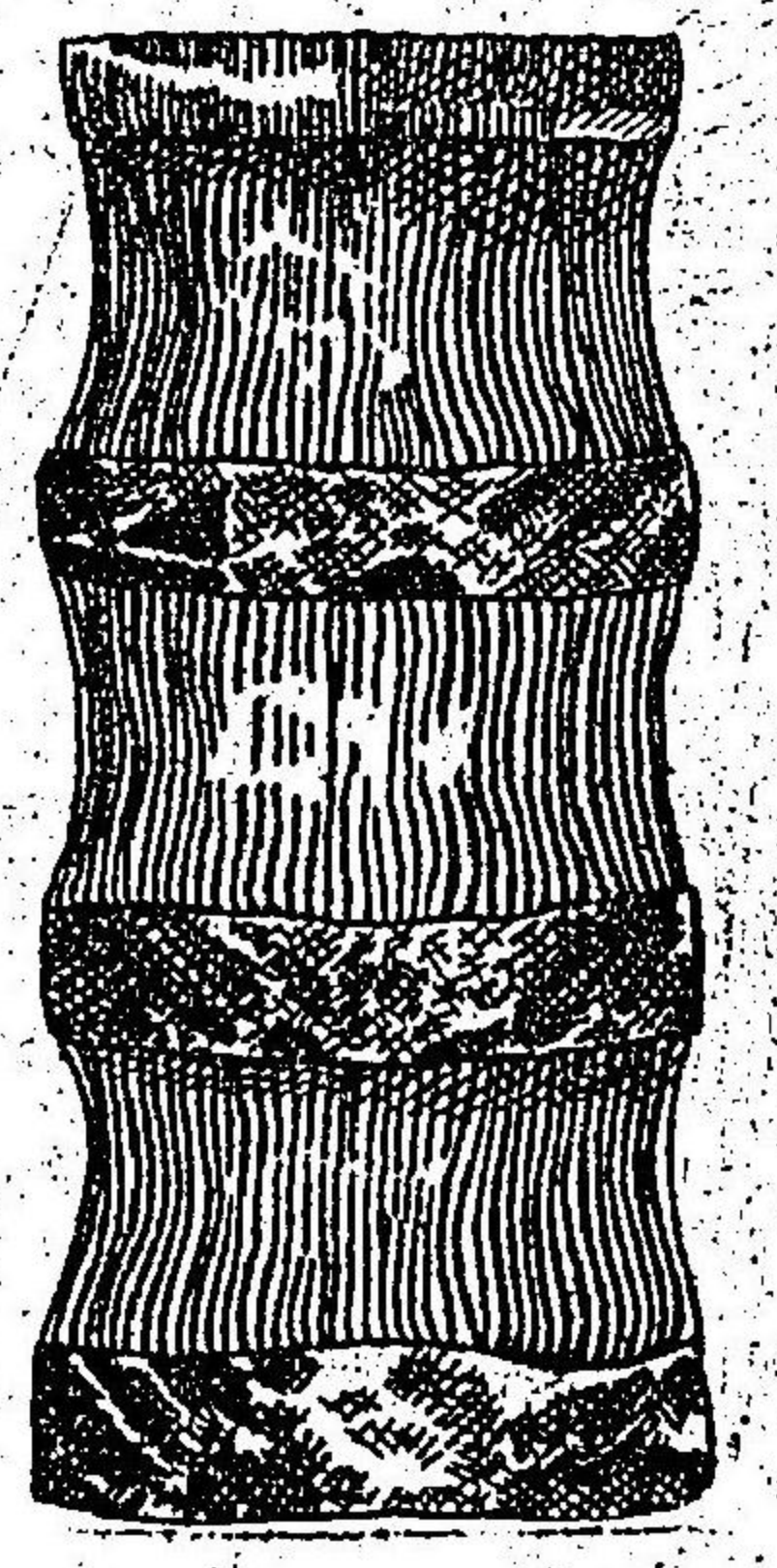
ホネニナルハタラキ



第十四圖

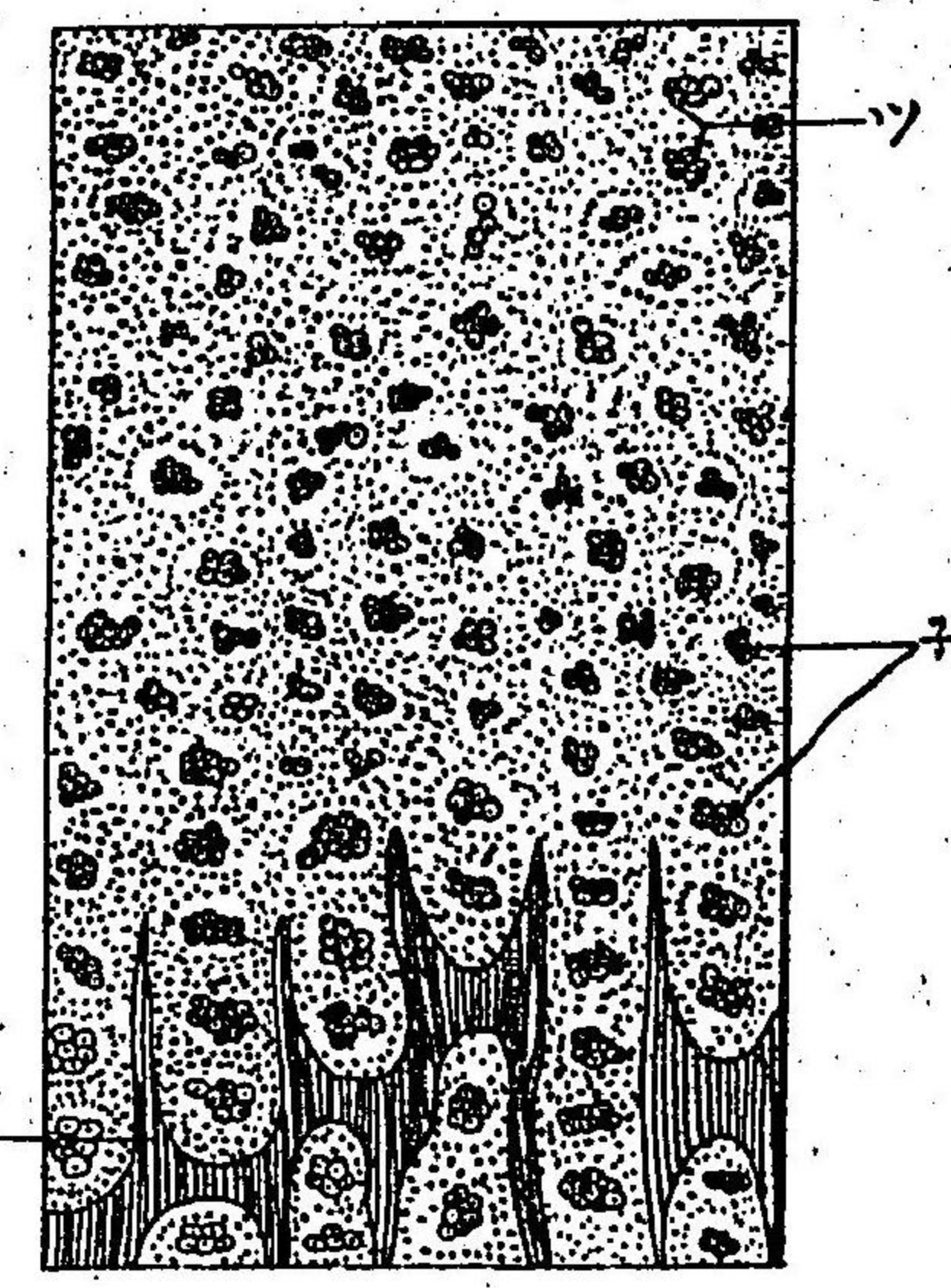
ヲ為ス 骨ニ化ス 去テノ項之レヲ 截斷シテ其一片ヲ取リ顯微鏡ヲ用キテ其造構ヲ窺フ者ニシテ總テ軟骨細胞ハ軟骨ノ玻璃様質中ニ包マレ存スル者ナリ

第十五圖



〔ツ〕 化骨營作中

第十六圖



ノ部ヲ距テタル軟骨細胞

子 化骨管作部ノ中心ニ密接スル牙ノ軟骨

細胞

ヲ 始テ化骨シタル細小片

第四篇

筋ノ總統及其造構

第十七圖

此圖ハ卷末ニ掲グハ全身体ノ前面ノ諸筋ニテ其平

常ノ位置ヲ示ス者ナリ但シ此諸筋ノ下ニモ指數多

ノ筋アリト蚕氏圖中一齊ニ表示スルヲ得ザル

モノト知ルベシ○筋ハ運管ノ根基ニシテ長短

方圓淡紅濃紅ノ別アリ而テ又皮膚ニ接スルアリ骨ニ接スルアリ腔内ニ在ルアリテ圖中一齊ニ表スル能ハザルモノハ其各種各部ノ筋錯綜重層スルヲ以テナリ因リテ其各筋ノ作動及位置等ハ順次ニ下文ニ述ブヌシ

○顔面頭部及頸部ノ筋

1 前頭筋○即頭皮ヲ動カスノ筋

2 眼瞼閉筋○上瞼ヲ舉ケ眼ヲ開クノ筋(即

眼舉筋)ハ眼窠ノ内部ニ在リ故ニ圖中ニ

之ヲ示スヲ得ズ(此筋ハ第五十七圖ノ)

弛ニ在リ参考ス可シ

3

上唇舉筋即口ノ隅角ヲ舉クル筋

6

下唇降筋即口ノ隅角ヲ下グル筋○上唇

舉筋上唇ヲ舉ケテ下唇降筋下唇ヲ下グ

レハ即口ヲ開ク

8

兩唇引縮筋即閉キタル口ヲ閉ル筋

9

鬚ノ筋

10

咀嚼筋○9号及10号ノ筋モ亦共ニ咀嚼

ノ用ヲ作ス者ニテ其二筋收縮スレハ下
顎骨之ニ從ヒテ上リ上顎及ヒ下顎ノ齒

牙相接ス此機ニ因リテ能ク食物ヲ嚼碎
スルナリ

11

鼻孔閉筋○此筋ノ外側ニ密着スル小筋

ハ鼻孔ヲ開潤セシムルノ用ヲ為ス

12

頸皮ヲ收縮シ一ニハ亦下顎ヲ下ス作用

ヲ為スノ筋

13

頭ヲ直立セシメ一ニハ亦左右ヘ之ヲ回

轉セシムルノ筋

14

氣管降筋即氣管ヲ下クル筋○氣管舉筋

ハ下顎ノ下部ニ在リ故ニ圖中之ヲ示ス

ヲ得ス

○上肢ヲ胴へ結着スル四條ノ筋左ノ如シ但シ圖中ニハ其各個ノ一部分ヲ示シテ其全體ヲ掲ケス

15 僧帽筋即肩ヲ舉ル筋

17 大胸筋即臂ヲ胸前へ引ク筋

18 潤脊筋即臂ヲ脊部ニ向ヒテ引下ス筋ニシテ脊部中ノ最大ナル者

19 大鋸筋即肋骨ト肩骨トノ間ニ在ル鋸齒

状ノ筋ニシテ其用ハ肩ヲ前へ援引シ又

ハ之ヲ回轉シ或ハ臂ヲ頭上へ舉ケシムルモノナリ

○胴ノ下部ノ左ニ相對懸著スル大筋アリ其纖維ノ方向ニ由テ其名ヲ命スル者左ノ如シ

20 外科筋 ○此筋ハ腹ノ兩側ニ在リ而シテ又

別ニ其裡面ニ種々ノ筋アリト雖モ表面ニ其一部ヲ現ハス者ハ只左21号ノ一條

ノミ

21 直筋 ○此筋ハ腹部ニ在リ而シテ外科筋ノ

倚著 倚著ハ筋ノ末端附下ニ之ヲ見ル其作用ハ自收縮シ以テ腹中ノ諸臓ヲ斂窄スル是ナリ

○上肢ノ筋

16 三稜筋即臂ヲ舉ル筋

22 二頭筋即下臂ヲ屈曲スル筋ナリ第二十

圖ニ於テ猶明ニ之ヲ示ス

23 前臂筋○其作用ハ二頭筋ニ同シ

24 三頭筋○此筋ハ二頭筋及前臂筋ニ反シ

下臂ノ屈シタルモノヲ伸ハスノ作用ア

25 内轉方筋○腕關節及指ヲ屈曲シ下臂及掌ヲ内轉ス

外轉短筋○腕關節及指ノ屈シタルヲ伸

26 外轉短筋○腕關節及指ノ屈シタルヲ伸

ハシテ下臂及掌ヲ外轉ス

27 豆指轉筋即豆指ヲシテ自在ニ回轉セシ

ムル筋

28 小指轉筋即小指ヲシテ自在ニ回轉セシ

ムル筋

○下肢ヲ尻骨盤へ結合スル筋

29

縫匠筋 ○此筋ハ一方ノ脚ヲ引キテ他脚

ノ上ニ轉送スルノカアルヲ以テ此名アリ

而其真ノ作用ハ膝關節ヲ曲ルニ在リ

内轉股筋即兩股ヲ附接スル筋

31

伸脚筋即脚ヲ伸ハス筋 ○股直筋ナル者

モ亦脚ヲ伸ハス筋ノ一ニシテ次ノ第十

八圖ニ於テ之ヲ示ス ○脚ヲ屈スル筋ハ

股ノ後面ニ在リ故ニ圖中之ヲ示メサズ

○脚及足部ノ筋

32

屈足筋 ○足ヲ屈シテ脚ノ上ニ轉送シ又

33

趾ヲ伸ス

舉踵筋 ○此筋ハ腓腸ノ隆起ヲ作ス者ナ

リ第二十二圖ニ於テ猶明ニ之ヲ示ス

34

外轉足筋

35

環狀膜帶 ○環狀ノ体ヲ為シテ脚ヨリ足

部ニ渉ル諸腱ヲ束ネ各自ノ位置ヲ變セ

ガラシムル為メノ者

36

伸趾短筋

○足ヲ内轉スルノ諸筋ハ腓腸ノ潤大ナル筋

ノ裏面ニ在リテ隱匿ス足ノ運轉ニ屬スル

筋數多アリト雖片多クハ蹠部ニ在リテ上ヨリ之ヲ見ルヘカラス唯伸趾ノ用ヲ為ス一筋³⁶ 踏ノ上ニ位シテ之ヲ見ルベキノミ

第十八圖^{モリスナステ}ハ股直筋前面ノ形容ヲ示ス○此筋ハ

膝關節

ニ位シ

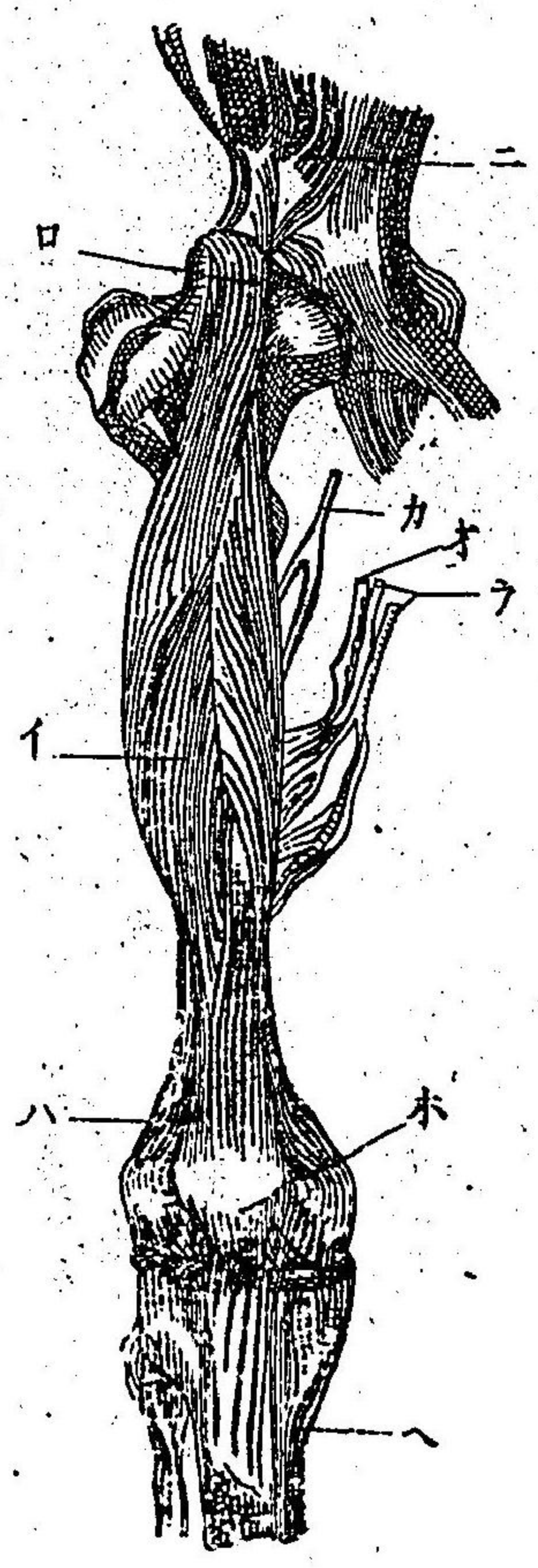
テ伸脚

諸筋ノ

中ニ就

テ最モ

第十八圖



貴要ナル者ノ一ナリ

イ 股直筋ノ中心

ロ 股直筋底止^{底止ハ筋發生スル}初^初ノ附^附著^著處^處ナリ

ハ 股直筋倚著ノ腱

ニ 髌骨^{トシコフ}

ホ 膝蓋^{シツカイ}○即俗ニ云フ所ノ膝ノ皿ニレテ膝

ノ前面ノ屈折ヲ防ク者

ヘ 脛骨^{ハギホネ}

カ 股直筋へ單及スル神經

オ 股直筋ヨリ發起スル淋富管○此管淋富

液ヲ輸送ス

ラ

股直筋ノ血管○圖中後ニ畫ク所ノ一管

ハ此筋へ血液ヲ

輸入シ其前ニ畫

ク所ノ一管ハ此

筋ヨリ之ヲ輸出

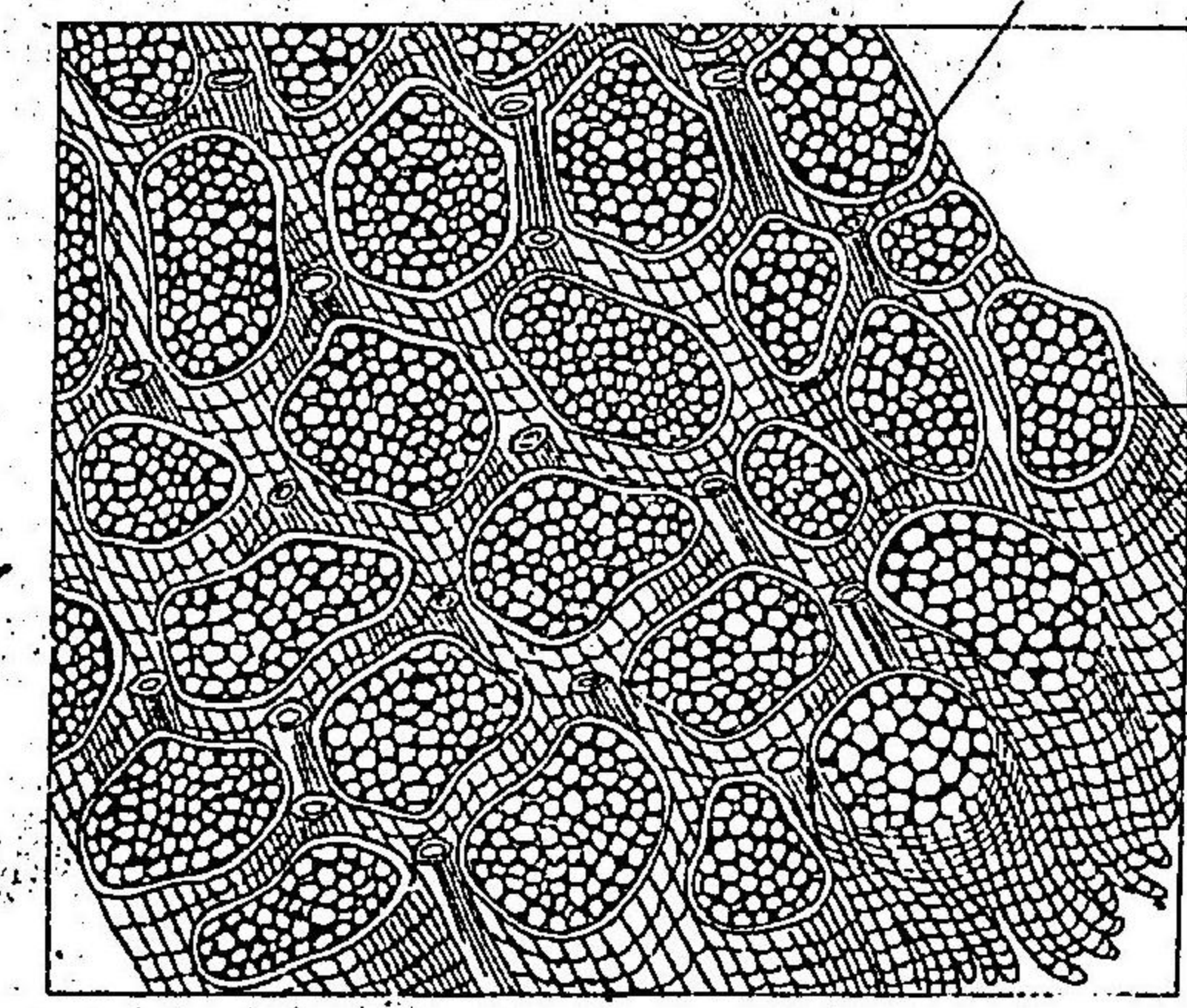
ス

第十九圖ハ顯微鏡ヲ用

キテ筋ノ小片ヲ窺視シ

以テ之ヲ造成スル所ノ

第二十圖



筋纖維ノ造構ト其毛細血管へノ關係トヲ示ス者ナリ

イ

筋纖維ヲ横斷スルノ面

ロ

筋纖維鞘即緻密透明ニシテ筋纖維ヲ纏

裏スル膜

ハ

細纖維即筋纖維ヲ造成スル線條ノ体

ニ

毛細血管即駢行スル筋纖維ノ中間ニ在

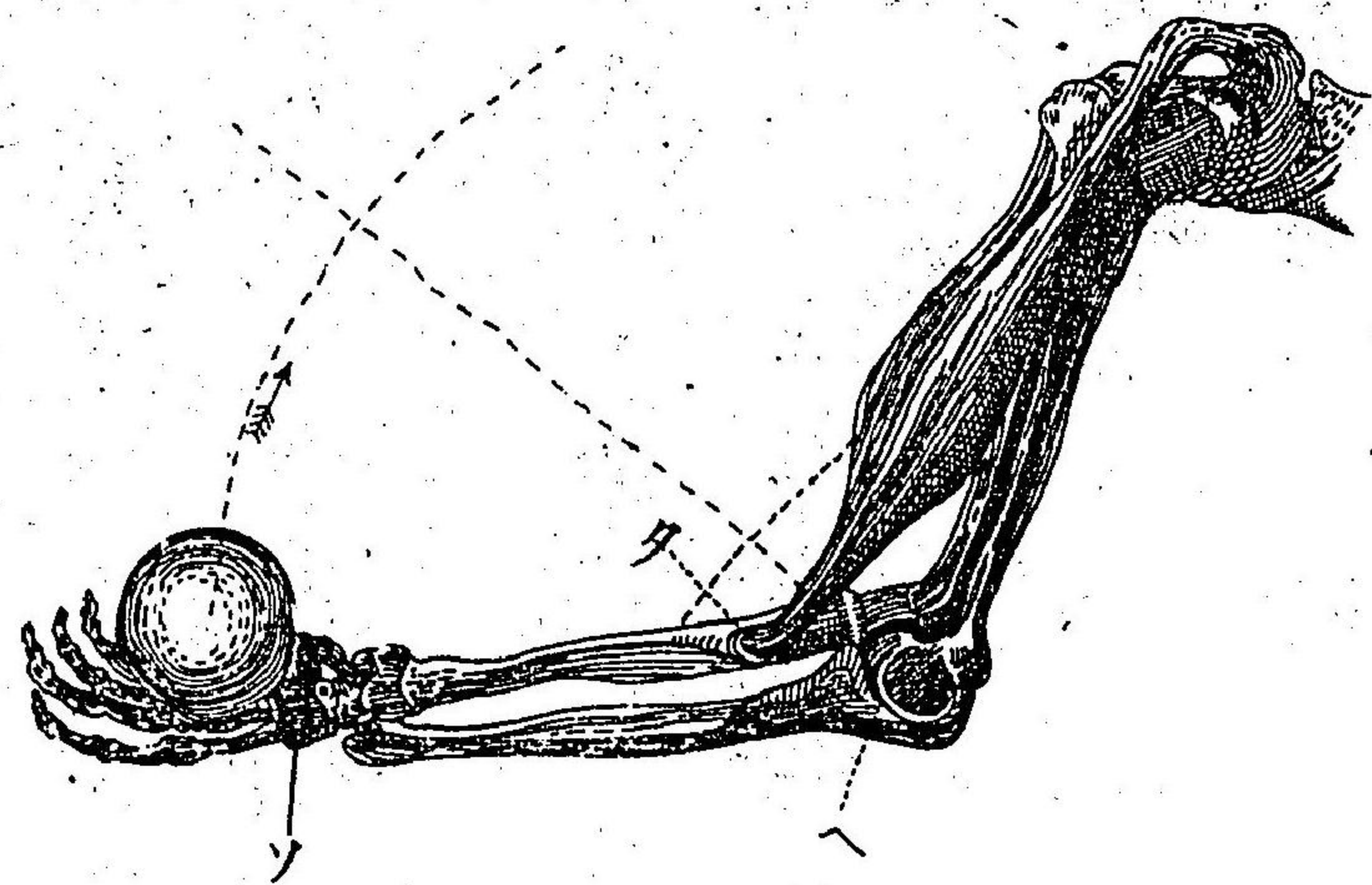
ル細管ニシテ血液ヲ輸入シ纖維ヲ養成

スル者

第二十圖ハ二頭筋及上肢ノ骨ヲ示ス○二頭筋

ハ下臂ヲ曲ケテ之ヲ上
 臂部ニ舉ル諸筋ノ中ニ
 就テ最モ主司タル者ノ
 一ニシテ肩胛骨ヨリニ
 條ノ腱即二頭ヲ以テ發
 リ挽骨ニ倚著ス人此筋
 ノ作用ヲ了知セント欲
 セハ其運動力ハ此倚著
 タノ處ニ在ルヲ知ル
 ヲ要ス又運動ノ中心即

圖 十 二 第

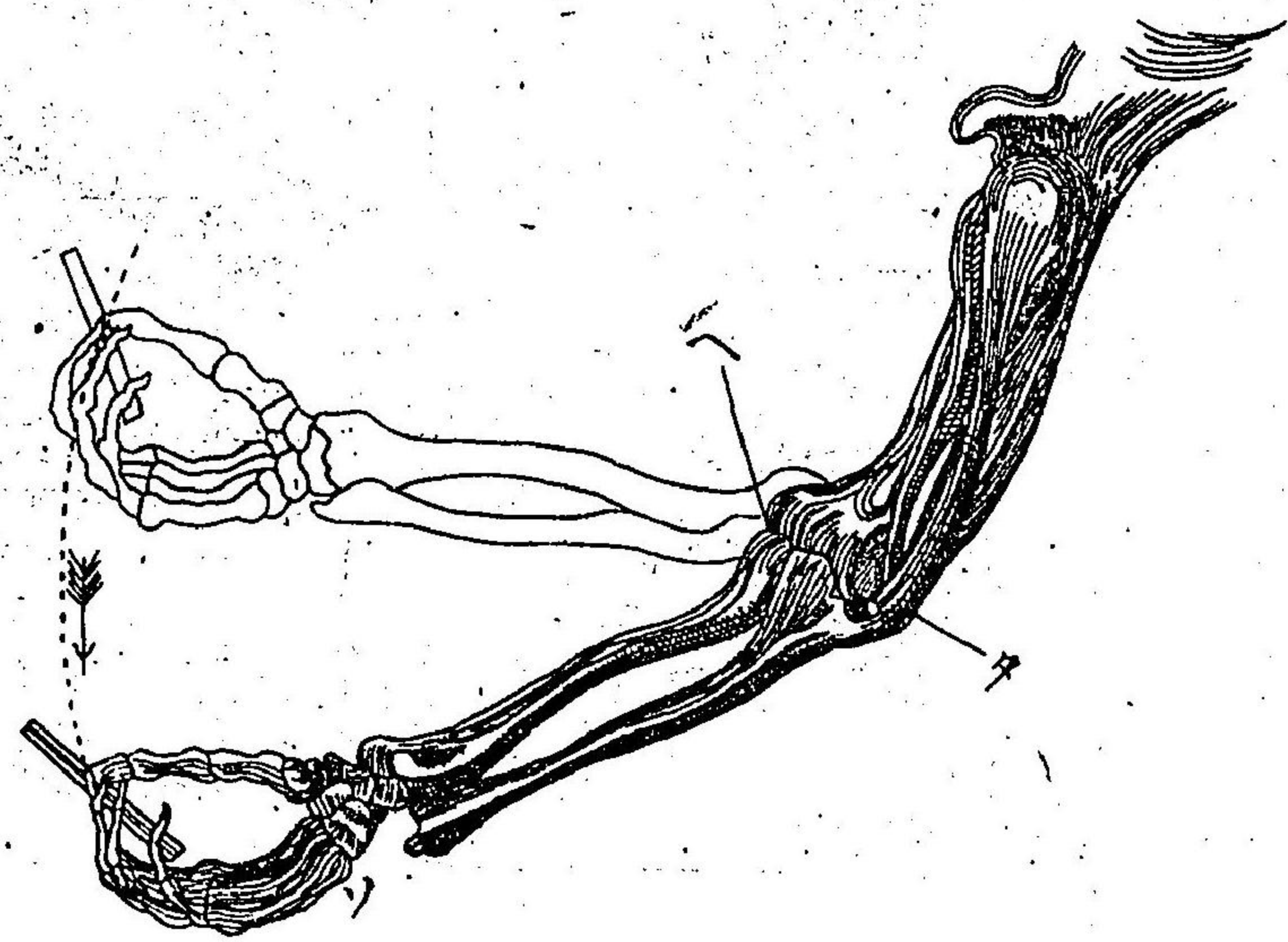


支點ハ肘關節ニ在リテ掌ニ重キ物体(即之ニ
 抵抗スル者)ヲ載スル能ク之ニ勝フ圖中ノ
 點線及矢ハ上肢ノ屈曲ニ從ヒテ手部動キ行ク
 所ノ經過ヲ示ス者ナリ

第二十一圖ハ三頭筋及上肢骨ノ前面ヲ示ス○
 此筋ハ屈曲シタル下臂ヲ伸ベテ真直ナラシム
 ル作用ノ者ニシテ其原三頭ヲ以テ發ル其一頭
 ハ肩胛骨ヨリシ其二頭ハ膊骨ヨリス而シテ其端
 尾ヲ尺骨ノ上端ニ倚著ス圖中記スル所ノ點線
 及矢ハ屈シタル下臂ヲ伸ハセハ手部之ニ從ヒ

テ行ク所ノ線路ヲ示
 ス者ニシテ又只線ヲ
 以テ下臂及手部ノ外
 圍ヲ畫ク者ハ其屈曲
 シタル模様ヲ示スモ
 ノナリ圖中ノ夕ハ此
 筋膜ノ倚著スル處ニ
 シテ力點此ニ在リハ
 ハ肘關節ニシテ其支
 點トナリ而シテ印掌

圖一十二第



ハ重力ノ在ル處ニシテ即抵抗ヲナス者ナリ
 第二十二圖ハ腓腸ノ大筋脚及足部ノ側面ヲ示
 ス○此等ノ筋一ハ大腿骨ニ發リ又一ハ脚部ノ
 骨ニ發ル其作用ハ人ノ歩行ニ或ハ翹足スル片

ニ當リ
 テ踵ヲ
 舉ルニ
 アリ而
 ノ此筋
 ノ力ハ

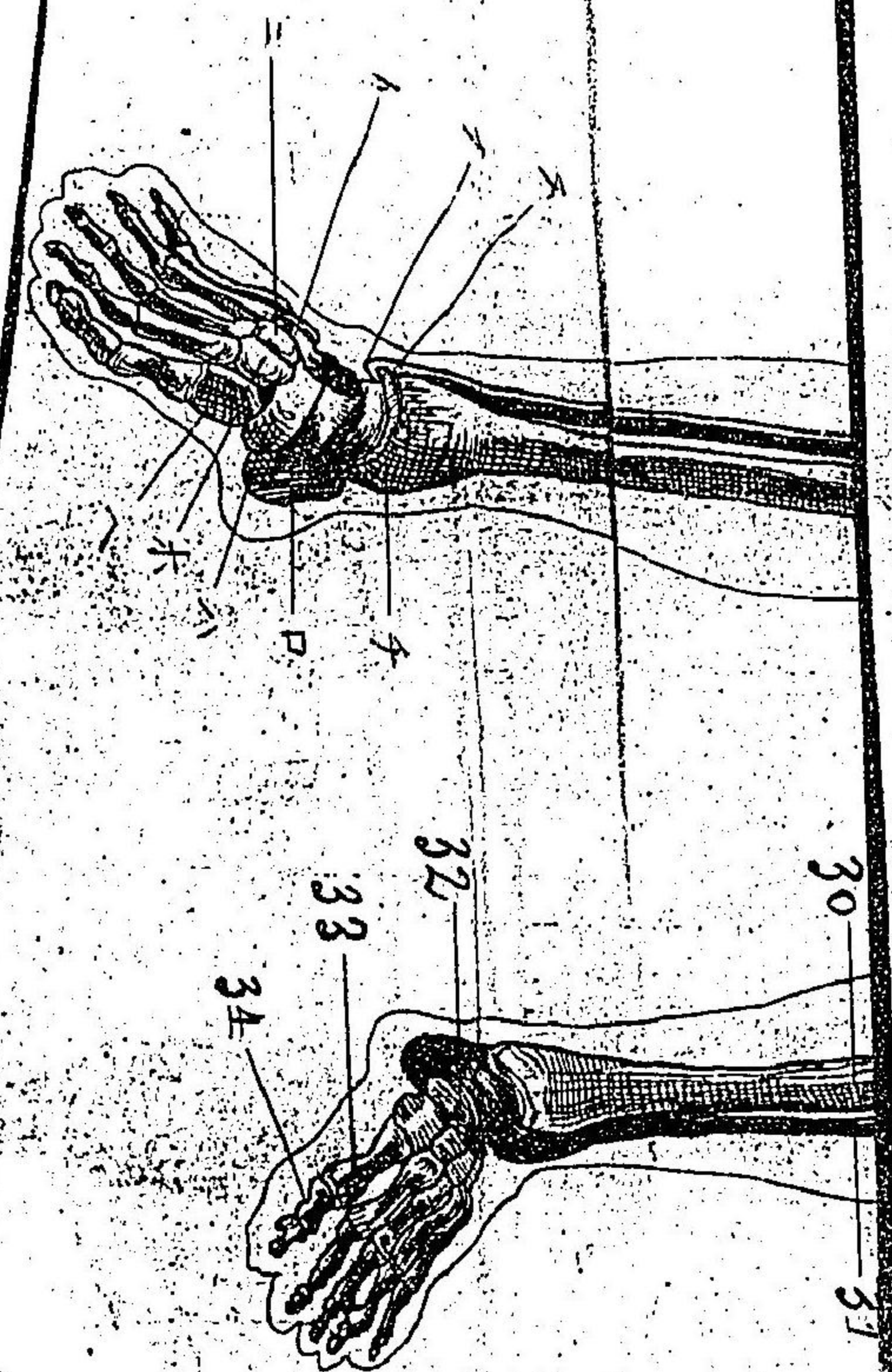
圖二十第



其倚著即踵ノ骨ニ大ナル腱ヲ以テ停駐スルノ

處ニアリ

人身理解剖卷之上終



圖

一

第

31

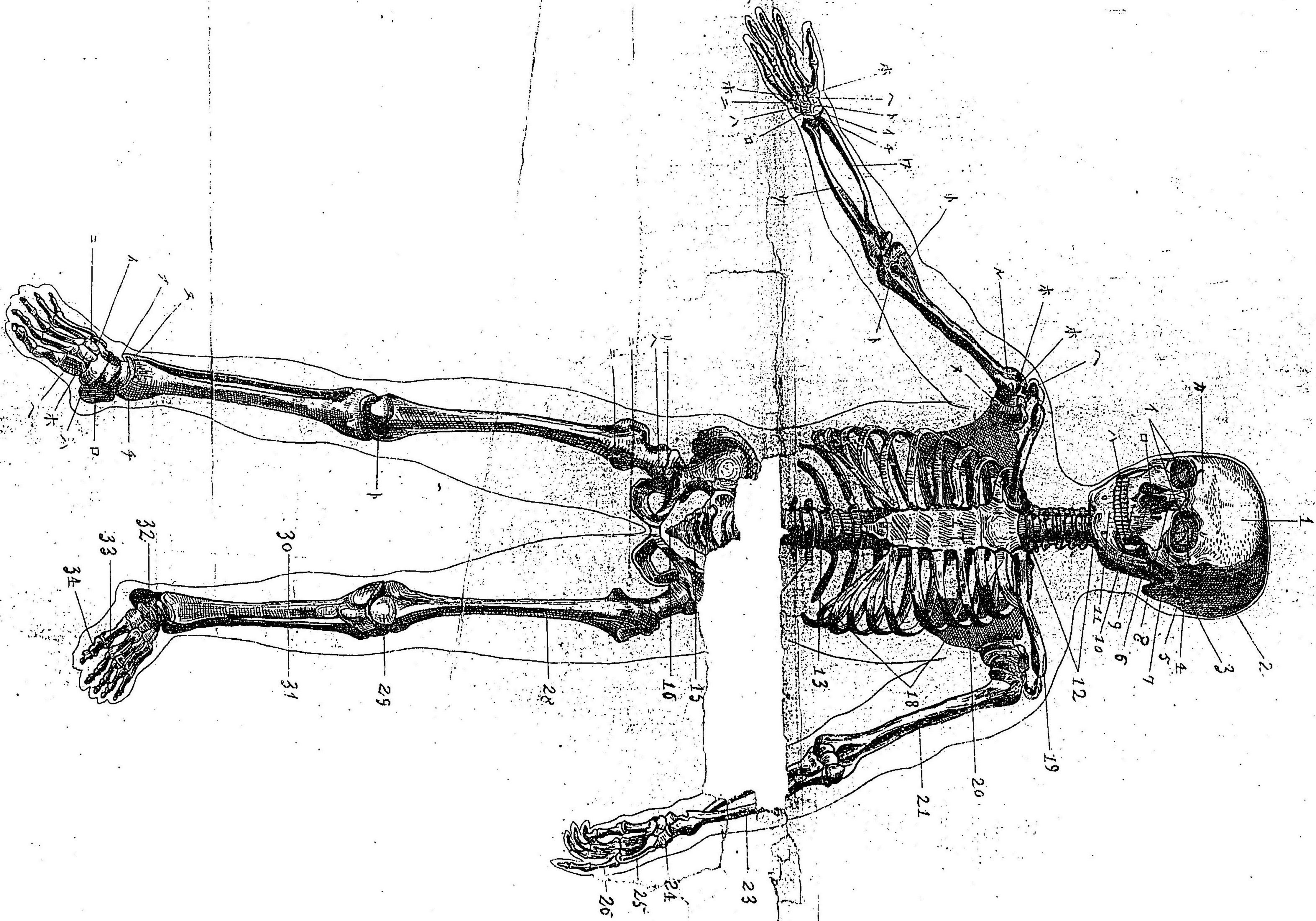
30

32

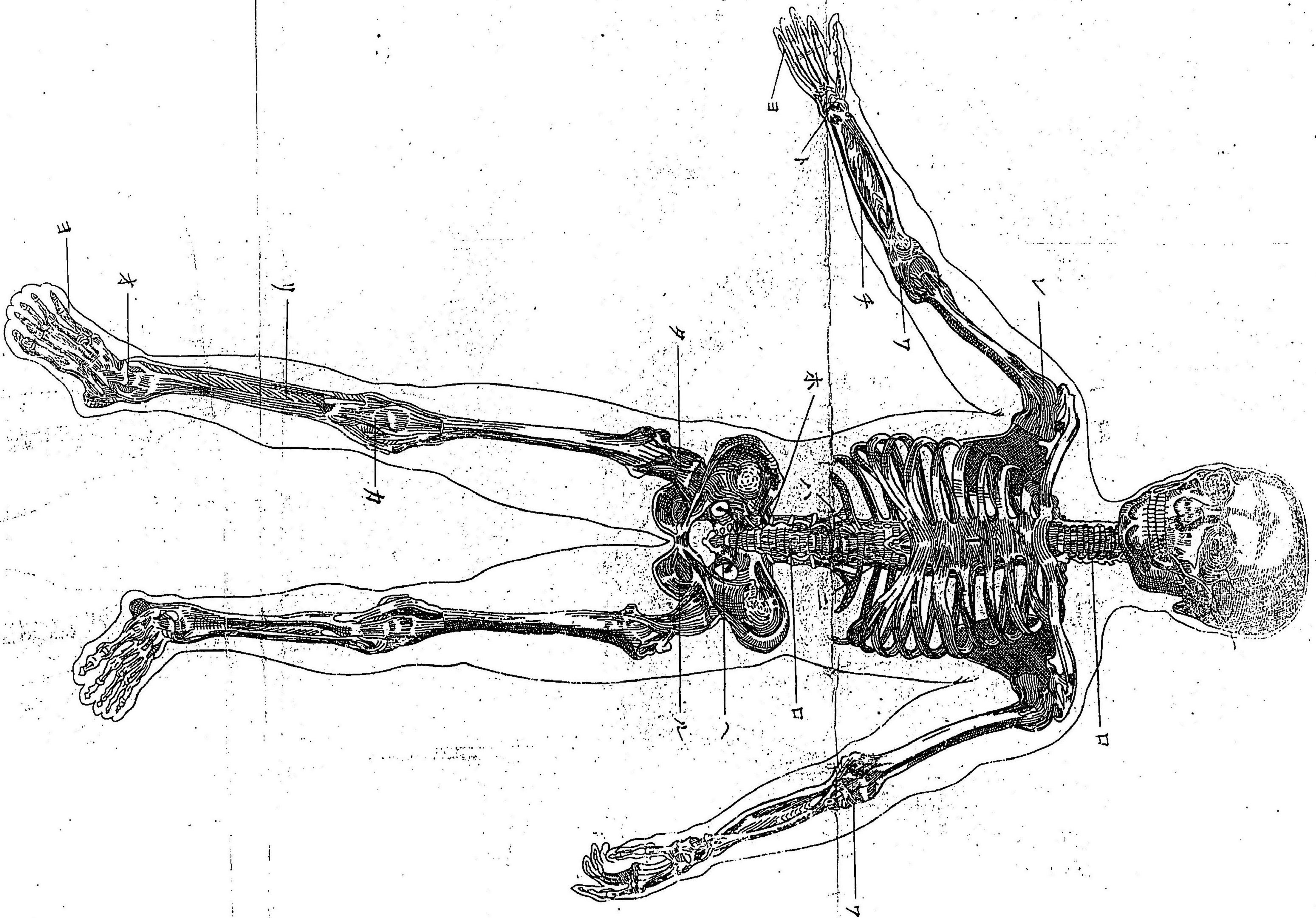
33

34

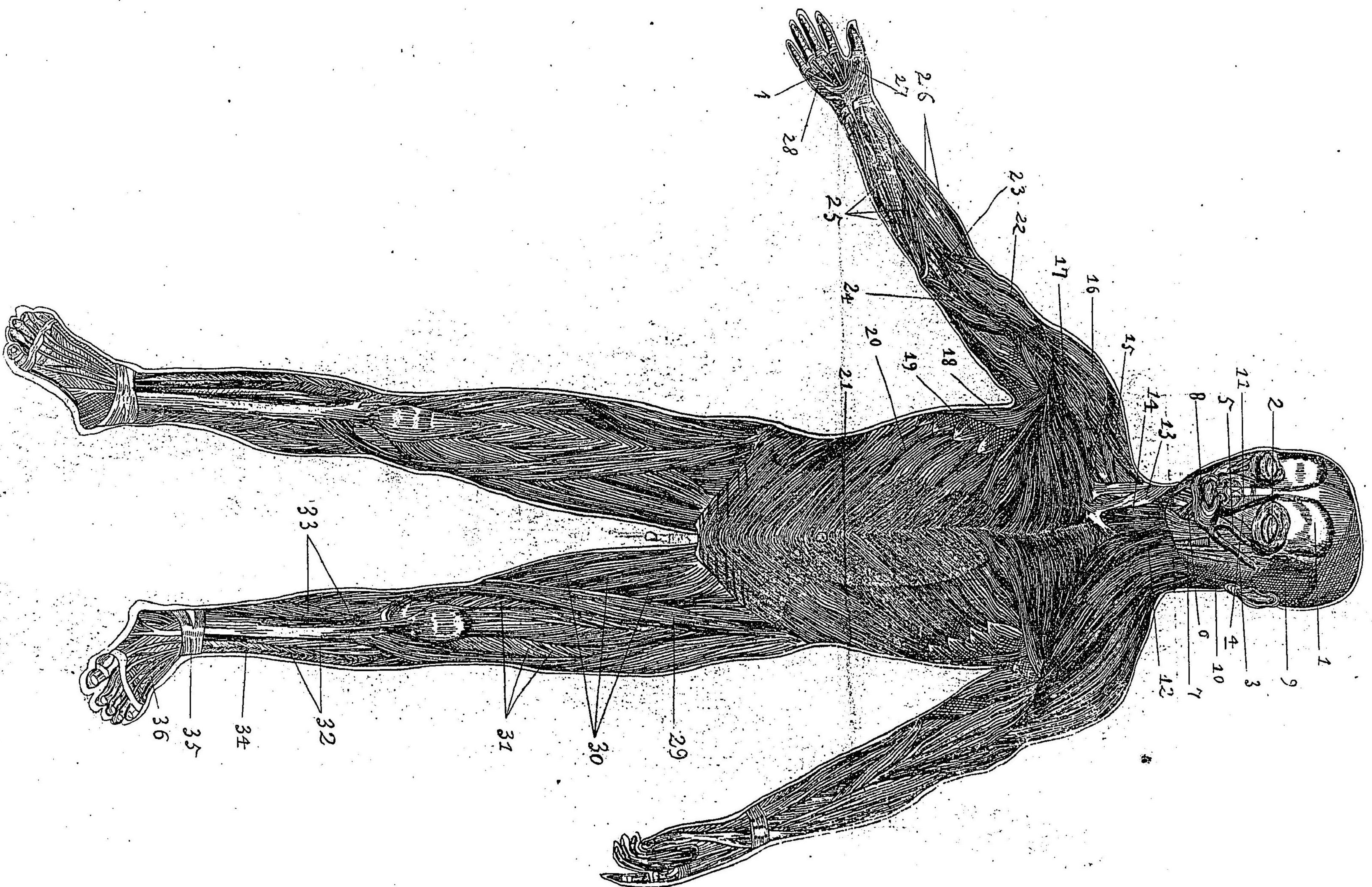
圖 一 第 一



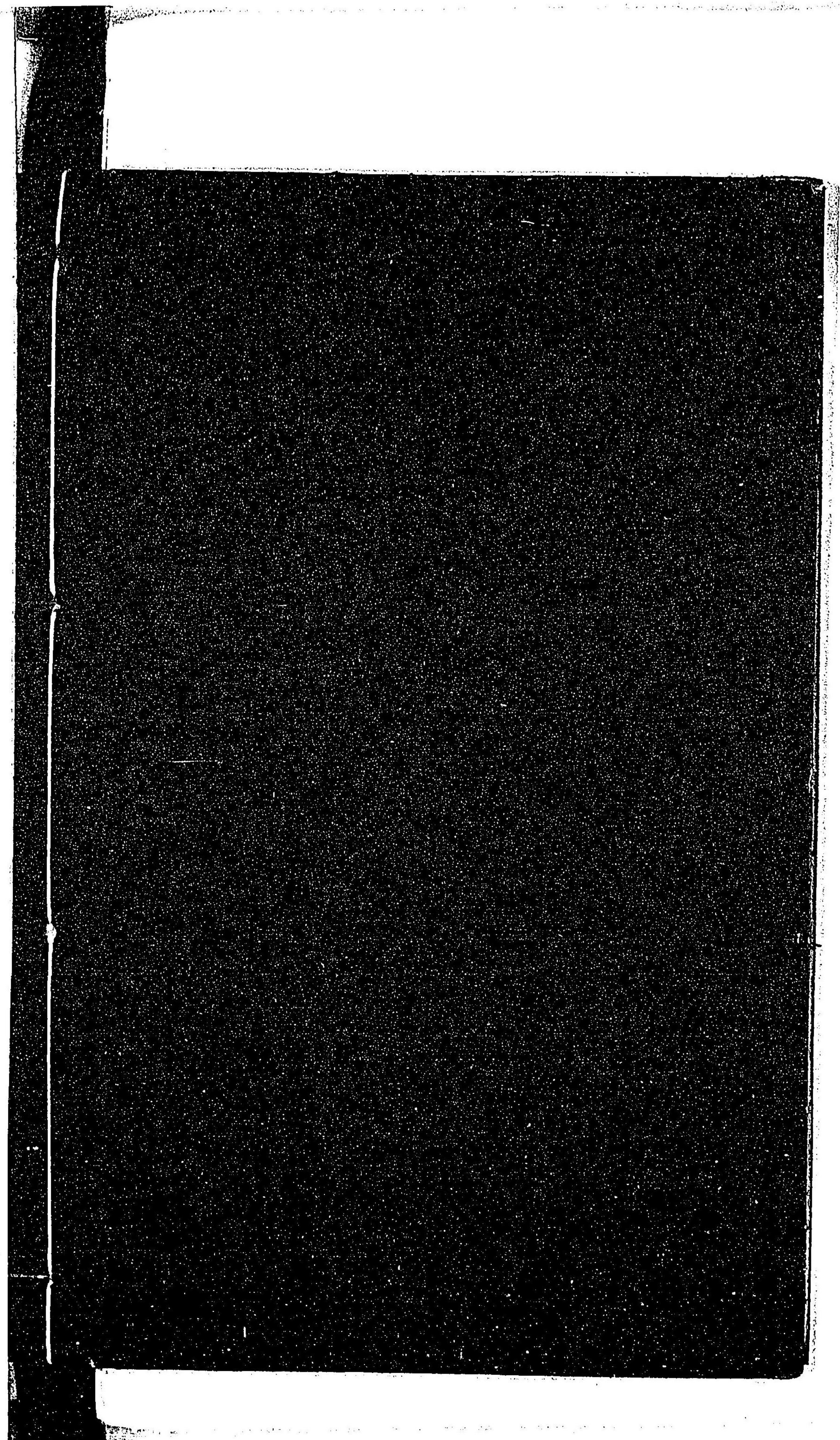
第七圖



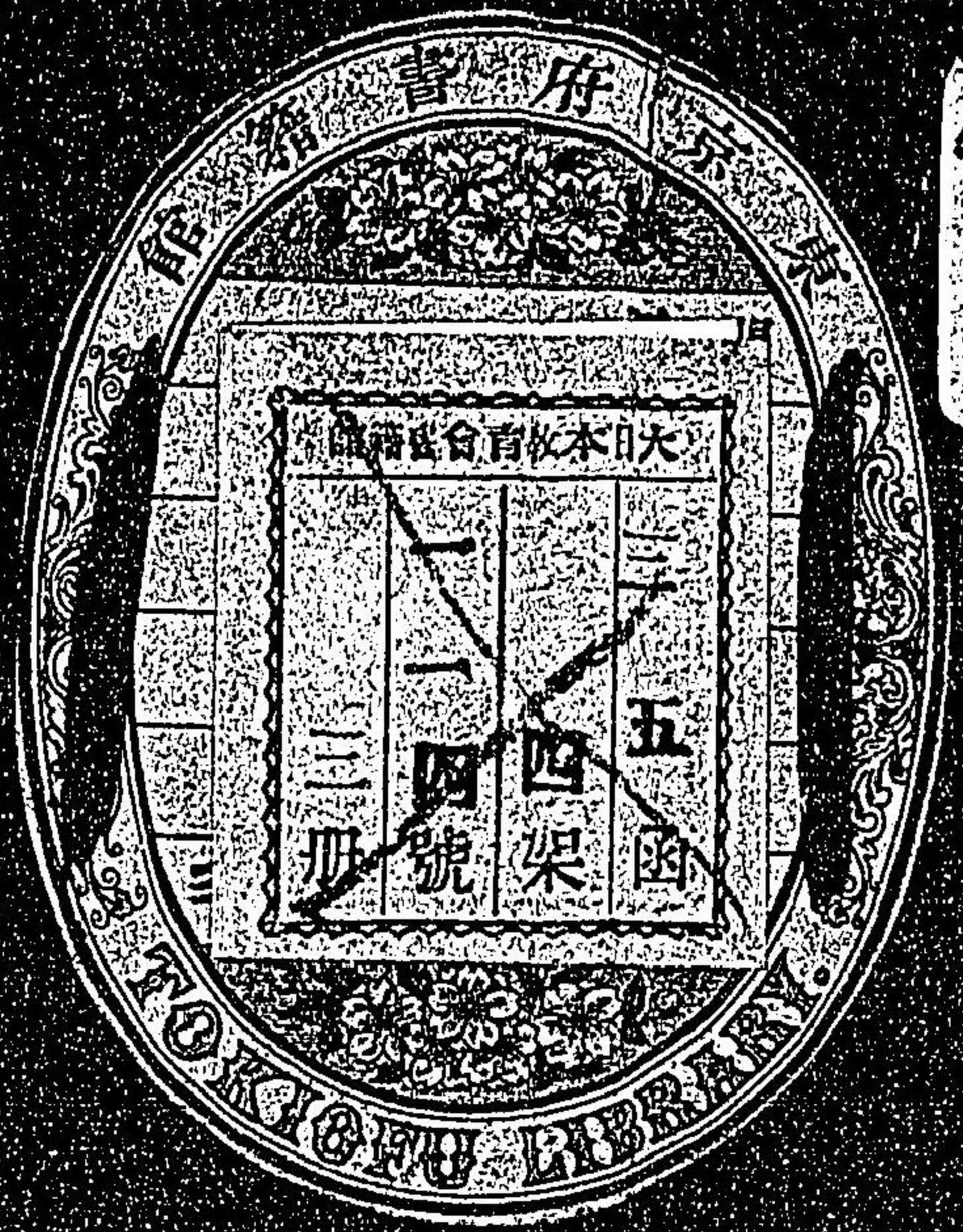
圖七十第



Handwritten notes in a notebook, including the word "LASSON" and other illegible scribbles.



人身
理解



特 37
594

素

譯
上

058200-001-4

特37-594

人身生理解剖

志賀 雷山/訳

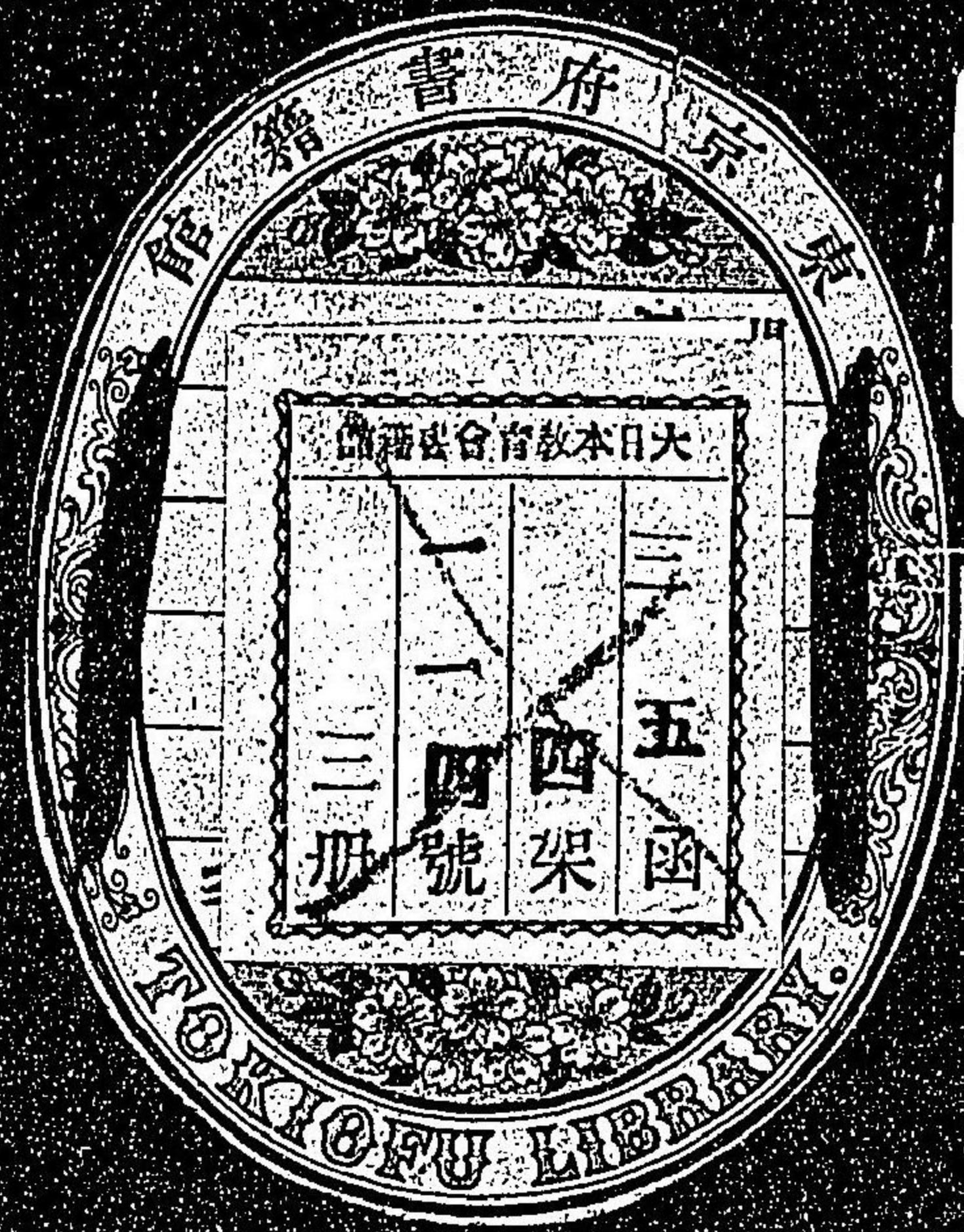
上

M10

CBB-0370



身人
生理
解



特 37
594

六
素

譯
上